

# 言の葉俱樂部

ことのはくらぶ



kotonoha club-II Vol. 9 2012.3.30

言の葉倶楽部・ii 第九号 目次

エッセイ◎わかめ を、さわ英幸 2

エッセイ◎ほんの山くづれて 福岡俊一 4

エッセイ◎「もつたいない」時間 尾崎まりえ 6

箴言◎ぐうたら草 第百十九段〜第百四十三段 菊地隆三 14

論考◎、象徴、への航海(三) 鎌上 宏 23

詩◎言葉とのおつあい、他 大江利知 32

童話◎うそつきニヤンコ／みかづきさまの子守唄 大武芳子 39

ノンフィクション◎青い稲穂 佐藤藤三郎 46

私信◎前略 沼尻エリカ様 高橋英司 54

論考◎「薩摩藩邸焼き討ち事件」考 岩井哲 59

編集後記 66

# わかめ

◎を、さわ英幸

いくら心太が好きとは言え、日に三食をそればかり喰らっていたのが悪かったようだ。

異変の現れたのは一週間目の朝、常の如く一度目の脱糞をしようと厠に赴けば、無色の糞が便器に出現したのである。それまで、青菜を喰らえば青の便が、レバーを喰らえば赤い便がと言う如く敏感に食物の影響を受けていたのだが、まさか透明の便を目にする事になるうとは思わなかった。そればかりか、豪快に放たれる屁も無音となり重ねて無臭と言う有り様だった。他人の屁は不快であるが、己の屁は幾らでも嗅げるといふ人は多いであろう。その一人である私も、香ばしくない放屁に物足りなさを感じたのだった。

その時はまだ、心太との因果関係に思い及ばず、冷蔵庫を開けて買いだめされたのを朝食としたのだった。井に満たされた透きとおる心太は恰も波のように絡まり、浮かぶ氷は女体のように艶めかしかった。それら海そのものを口に含む度に、私は人魚と昇天するような感覚に満たされていたのである。その快楽を回避する如何なる理由もある筈が無かった。

それから三日後の昼、それは今日の午後三時のことであった。やはり心太を携えて職場に行き、それを昼食として午前の疲れを癒した後、既に見慣れはじめた透明の糞を便器に満たして厠を出ると、顔色が悪いね、と同僚に指摘された。

そう言われ鏡を見たのであるが、数十年見飽きた顔をこの時ほど凝視したことは無い。日

焼けしていた顔面は奥が透ける程に蒼白だったのである。服をめくって足や腕を見てみれば、体中が脱色し始めていた。余りの驚愕にめまいを覚え、そのまま気を失ったようである。

気がつくくと病室であった。腕には黒い液体の流れる点滴針が刺さり、時計の針は三時を指していた。

「ただいまより、院長の回診が始まります」

という放送に続いて入って来たのは口髭を蓄えた老紳士であった。

「少し落着きましたかな」

莞爾としてそう口を開くと、

——救急車で搬送されて来た時は大変危険な状態であり、血液検査をしようにも大変まれな、いや奇異なことであるが、全く色が無く困惑した。周章して血液製剤を注入してその場をしのぎ一命を取り留めたのだ。いまは、更に効き目のある当医院開発の『黒血（ブラックブラッド）』を試しているところだ。それにしてもなぜあのような状態で生きていられたのか不思議でたまらぬ。また、新たな奇病なのか分らぬが、原因はいまだつかめぬ。

と説明してくれた。

夕方、点滴を換えに来た若い看護師に、心太を喰いたい旨を告げると、はっとしてメモを取り急ぎ足で部屋を出て行った。

それから程無くして出された夕食はわかめの酢の物であった。私の希望は認められなかったようである。磯の香りは楽しめたが物足りず、波のゆらめく音のみを、聴きたくて仕方なかった。

# 本の山くづれて

◎福岡俊一

本の山くづれて遠き海に鮫

小澤 實

昨年三月十一日の大震災。私の書齋と書庫の本という本はなだれをうって崩れ落ちた。本棚に書籍とともに置かれていた写真、置物、缶類、小瓶、手紙：これらすべてのものも四方八方に散らばり放題に散らばり、足の立て場もなかった。

私の書齋は、あの森茉莉が、「森の中の木葉梟」という随筆の中に書いているのと同様、ごちゃごちゃとした雑然とした、まさに鳥の巣のような棲み家ではあったが、その巣窟にも一応の秩序をもってさまざまなのは置かれていたはずだったのだが。

それらが、もはや何とも言いがたい混沌の極みを呈してしまった。余震も大きく、多く、しばらくは部屋中のいたるところに本や物を平積みにして過ごす日々であった。持仏の間に安置されていた仏様も、その中の一体が転倒し、ひどいお姿になられた。

八臂で明王の像容を持ったその仏様は、これまで私の諸々の悩み事を救ってくださったが、地震のために倒れて、八本のうちの六本の腕が痛ましくも挽げ落ちてしまったのだ。仏師にお願いして修復をいただいたが、その際に大きな発見と小さな発見があった。

大きな発見は、この仏様が明王ではなく、異形の波乗り弁才天であったということだ。それは、修復の際に真っ黒に付着した煤の汚れを落とす作業で明らかになった。奇しくも、ふくよかな鬢と波模様の台座が現れたのだ。何とも摩訶不思議な水の出現。水の威力を想起する出来事だった。

小さな発見というのは、古来より仏像の修復に際して、多臂の仏像の場合、手の位置を付け違えた事例が散見される。長年疑問に思っていたが、こうして実際に持仏に変更が起こってみると、どれが第一手から第八手であったやら：積年の謎が解ける思いであった。

それでも、我が家の被害はその程度で済んだ。しかしながら、遠い海沿いの地域では、鮫どころではない恐ろしい津波が陸地に暴れ込んでいた。被害の凄まじさはここで改めて述べるまでもない。海水はあまりにも多くのものを呑み込み、呑み尽くしてしまった。

大震災後、音楽教師の本務においても、数々の演奏会が中止や延期となるなどして、少なからぬ影響を受けた。ガソリンの不足は遠距離通勤にも痛手となった。半年ほど経て、書齋と書庫の整理がほぼ完了し、読書欲は元に復したが、創作欲はついに年を越すまで戻って来なかった。

温泉地では湯量が減ったり、中には涸渇してしまったりという現象が起こったようだが、私の創作欲もそれと似たような衰えを生じた。ようやく、心境の変化が起こってきたのが今年の夏に入ってからと思われる。そして、現在はまた俄然何か書きたいという気持ちが湧いている。

そうした経緯で、再び本誌に投稿をさせていただくことにした。今回は、三年半前に大船渡線、三陸鉄道、気仙沼線を乗り継いだ、私の大好きな例の鈍行列車旅行記を、大震災追悼文を兼ねて投稿する所存である。これらの鉄道の復興を強く強く望みながら。

今も、余震はときどき起こる。しかしながら、時はオリンピックの方々にニュースの関心が転じている。しかし、大震災の記憶は決して薄らぐものではないし、また薄らいではならないものだ。そう痛感している。

震止まぬ陸に夏草生ひ茂る

福岡俊一

# 「もつたいたい」時間

## ◎尾崎まりえ

寂しい。

人は、白い光や青い火を見ていると、心まで鈍感で冷淡になる気がする。特に、他人への気遣いがない携帯電話のマナーの悪さには唾然。所かまわず大声で話していたり、話しながらハンドルを握っていたり……。周りの人たちが平和に生きている時間を邪魔し脅かしているのに、自分の時間だけが「もつたいたい」とばかりに平然と動き回っている。

己が手の携帯電話に操られ

休む間もないヒト型ロボット

昭和の子ども時代、「もつたいたい」と、耳にこびりつくほど言われた。食事を残したり文房具を粗末にした時のお説教のキメ台詞だったが、今はなにしろ、電気が「もつたいたい」ご時世。なのに何故、夜中まで店が開いているのか、一晩中テレビ番組を放送するのか。そもそも、昼夜の感覚が狂ったのは、当の電気の色いでは？ 太陽光の色なら、朝から夕方へと変化する。人間も、その色を感じ取って体内時計が働き、動物的本能で一日の時間の流れを乗りこなしていたはずだ。電気の白い光を浴び続けているうちに、感覚が鈍くなったのかもしれない。

家庭の台所では、薪の赤々とした炎と入れ替わったガスの火が青い。いまでは、炎の色どころか形さえ見えないまま調理できる電磁器具もあるのだから、もの

当な暮らしに戻った青年がいる。彼は、テレビの中で「俺、今までなにやっていたんだろう」と思っていて……と照れくさそうに笑っていた。

限りあるものは、何にせよ「もつたいたい」。生きていられる時間が限りあるものと知ったとたん、浪費していた時間が、自他ともに「もつたいたい」のを悟る。時間を大切に使用するとすれば、周りに迷惑をかけず真っ直ぐに生きてゆけるのだ。

線香を 逆さまにして火を点ける

花火の一生

人の一生

『言の葉倶楽部Ⅱ』第三号

短歌「花火の夜は(十八首)」より

二〇〇七年の六月に手術を受け、七月から始めた化学療法で髪や体毛がすっかり失せた八月の終戦記念日、引きこもりのまま気晴らしにつけたテレビに小野田寛郎氏が映っていた。終戦を知らぬまま戦い続け、その二十九年後にルバンダ島から帰還したばかりの小野田氏の鋭い眼差しは、ニュース映像を見た誰しもが目にした焼きついているはず。しかし、この番組「生き抜く小

五年前、「癌」を告知された日、命に限りがあることを実感した。寿命が人それぞれに違うと知ってはいても、自分があと何年何日何時間生きているかなど具体的に考えたことがなかったので、急な身辺整理に忙しかった。私にかぎらず、ほとんどの人は、何事もなく健康なうちは「人生の終わりが来るのはまだまだ先のことさ」と高をくくっているにちがいない。

中高年ですらそうなのだから、まして若者ならばなおさらのこと。東日本大震災の惨状を目の当たりにした後、命の重さと儚さを痛感して暴走族を辞め、真つ野田寛郎(二〇〇五年の再放送で三十一年ぶりに見たのは、柔和な笑顔で穏かに語る老紳士だ。別人かと思ふほどの転身ぶりに驚きつつ、その死生観に引き込まれた。人は、どんな時でも、本能的に生きようとするのだという。

対談した戸井十月氏が、貴重な青春の三十年間を失ったことへの後悔はないか？ という旨の質問を向けたところ、小野田氏は「後ろばかり向いていると、前へ進むエネルギーが減る」と答えたように記憶している。生きるためのエネルギーを、自己実現に向けて無駄なく燃焼させたからこそ、五十歳を過ぎて結婚し、渡ったブラジルでは十年で牧場経営を成功させ、その後、日本と往復しながら「小野田自然塾」を主宰することができたのだろう。

一口に乳癌といっても、その顔つきは大きく五つに分けられる。私の場合は葉状腫から悪性に転じたタイプなので、平凡な顔。もう少し早く発見していれば、辛い化学療法を受けずに済んだはずだった。つまり、発見が遅れたのは、(かかりつけ医)の怠慢といえよう。主治医から「二年間で(癌を)育ててしまったんだね」と言われた時の悔しさは、生涯忘れない。

唇を噛み、うつむいて石のように暮らしていたせいか、七月の末には目眩(良性だったが)に襲われ、救急

車のお世話になる始末。そこで目を醒ましてくれたのが、小野田さんの言葉のパンチだった。過ぎ去った時間を取り戻せるわけでなし、くよくよ考えてもストレスになるだけだ。要観察だったはずの私に、笑顔で「大丈夫」と放置しておいた（かかりつけ医）の不実ぶりを決して忘れはしないが、その日かぎりキツパリと思いつくのを止めた。

時間は前へ前へと流れている。今、自分が手に入れたいもののためにエネルギーを集中させなければ……。せつかくの治療の結果が〈大吉〉と出るよう体調管理に努め、指示された通りに6クール12回の治療をやり遂げた。もちろん、一人でできたわけではない。主治医をはじめ看護師のみなさん、そして家族が、私の両脇からスクラムを組んで戦ってくれたことに一生分の感謝を捧げたい。

たまにスパー等で、疎遠にしている（かかりつけ医）の看護師たちに出くわす時がある。そこは大人の礼儀で「こんにちは」と普通に挨拶するが、大切な友人には「あそこには行かない方が身のためだよ」と、衷心から伝えている。

#### 砂時計

ひっくり返して戻しても

まった。五十年前の経験談など少しも参考にはならない。医学は日進月歩なのだから。

黒髪が蘇って還俗しても

Sの名前を見つけると

Mはここに居ないふりをする

二十九！ 三十！

容赦なく飛んでくる鎖にあたらぬよう

もうしばらくマグマの岩陰にかくれていた

『言の葉倶楽部Ⅱ』第四号

詩「居留守」最終連

闘病中に観ていたテレビで、「癌になっても、今までと変わらない生活をしたい」という保険会社のCMが流れていた。金銭的に安定した生活を意味していると分かってはいたが、日に何度も聞かされると言葉尻に噛みつきたくなかった。いまや国民の二人に一人が罹患する時代だ。癌になったって、人間として普通に暮らしているでしょ？

もっと腹が立ったのは、新聞で「癌になっても、頑張っています」という美談を見かける時だった。手術して五年間は免疫力が落ちないように生活したい癌患

もとの居場所は忘れてる砂

『表象』第19号 短歌十首

「かりそめの世にて」より

化学療法の期間中は、電話で話すだけでも疲れるので、だいぶ後になってから友人知人に病気の件を知らせた。それで感情を害し、「水くさい」と離れて行った人もいる。だが、当事者でさえ先が見えない闘病中に、皆に病名を知らせて何になるだろう――。

ただ心配をかけ、憂鬱な時間をもたらすのでは？ それに、聞かされた側は、放つてもおけずアドバイスしたくなるのでは？ 同じ病名でも癌の顔つきによって受ける治療が違うのだから、素人の耳学問（今は、ネットでの目学問も）はアリガタメイワクで、心が乱されるだけだ。

告知を受けた時、社会人になりたての息子が厳しい新人研修の最中だったので、お盆休みまで知らせなかった。しばらくは夫と二人で闘病していたが、やがて仙台の実母と群馬の義母に言わざるをえない状況になる。すると案の定、それぞれ電話をよこしては、乳癌になった友人の様子などを話して励まそうとする。ある日ついに「頼むから、しばらく放つておいて」と言つてし

者が、健常者ですら尻ごみするような烈しいスポーツをしているのを、立派な姿勢であるかのように紹介する。しまいには、健康で仕事をこなしている記者が、患者から「元気をもらいました」と結ぶのだから、矛盾の極みに呆れた。

患者は、日々を生きるだけで十分に頑張っている。その上さらに頑張れと煽つてどうする。癌になったら、これまで以上に善良な努力家になれというのか？ 主治医任せで、のん気に漫才や落語を観てゲラゲラ笑っていた私は、まるで怠け者みたいじゃないか。まあいいさ、誰が何と言おうと、もつともつと家族の笑顔を見たいから、癌になる前よりも頑張らないで暮らすと決めたんだ。発病する前と変わらぬ生活をしていては、また同じ病気になってしまう。マイペースに生きる私を、スパーのお惣菜や冷凍食品それにコンビニのお弁当が、黙って助けてくれた。

曼珠沙華

他人（ひと）の噂は聞き流し

かりそめの世にて片隅照らす

『表象』第19号 短歌十首

「かりそめの世にて」より

頑張らない暮らしは、元気になった今でも心がけて  
いる。といっても、だから暮らししているのではない。  
むしろ、一日の時間を計画的に使う。原則はただ一つ、  
睡眠時間を最優先にすること。どんなに面白い言葉が  
閃いても夜中にパソコンを開けたりしない。七時間以  
上眠るのを良しとすれば、起きていられるのは十七時  
間以下だから、毎日、時間が「もったいない」。

前号の拙エッセイで、私が誉め上手の手相であると  
書いたのが仇となつてか、ある男性から「お世辞はや  
めて」という旨のメールが届いた。いただいた詩集の  
感想をお送りした時のことなので、本意なままでは  
いられず「お世辞と解釈なさるかどうかは、受け手の  
問題なのでどうにもならないなあ」と思います。(中略)  
心が動かなければ、短歌も詩も手紙もメールも書きま  
せんので」との返信を送った。

専業主婦である私は、家事の合間に編み物もした  
し書き物もしたいし：e t c. だから、意味のないお  
世辞を書くために、起きている貴重な時間を割くつも  
りはない。なにせ歳のせい、書くための頭がスイス  
イ回るのは朝だけなので、自分の時間が「もったいな  
い」のだ。

ところで、詩集や同人誌の一冊あたり、どれほどの

行錯誤したオリジナル。特に、御親戚が無農薬で有機  
栽培しているという甘夏柑のジャムは、甘過ぎず、ほ  
ろ辛い香りがたまらない。「おかわり！」と、おねだり  
したいところだが、ジャムを作るには時間がかかるの  
だから、そうそう図々しくなれない。

瓶がツルツルの空っぽになるまで、ジャムに溶け込  
んだ彼女の時間ごと大切にご馳走になる。甘夏柑を送  
つてくれる御親戚に、お返しだっしてはいるはず。そ  
の他の材料を揃えて、皮を剥き、刻み、ことごと煮つ  
めてゆく手間もなかなかなものだろう。

どこにも売っていない美味しいジャムへの感謝の品  
は、どこにも売っていない物でなくては…。彼女が使い  
やすい形にバッグの編み図を起こして、彼女の洋服に  
合う色の糸を買いに行き、私の時間を編み込んで丁寧  
に仕上げた。届けに行くと、彼女は「お盆の挨拶回り  
に持っていきけるう」と弾んで、さっそく、去年プレ  
ゼントしたバッグから財布やハンカチや眼鏡ケース等  
を引越してみせた。

誰と食べよ？ 丸ピザ2枚の一日を

長針、短針、切り分けてゆく

時間が込められているのだろう。作者からご恵送いた  
だいた時間のぶん、それなりの時間をかけて読み、丁  
寧に感想を書いてお返事したいものだ。しかし、どん  
なに偉い人たちが高く評価した作品でも、どこかで賞  
をもらった作品でも、自分が共鳴しない時は返す言葉  
が浮かばない。お互いさまだよ、と言われそうだが…。

アルペジオ

和音こぼれて誰のもと

ハモる日もあり

ハモれぬ日もあり

『表象』第19号 短歌十首

「かりそめの世にて」より

編み物は自己流だが、かなりのキャリアなので手早  
い。それでも編み方や作品の大きさによっては、何日  
もかかるものだ。先日、アンダリアで作ったスターク  
ロッシェ編みのオリジナルの夏用バッグを友人にプレ  
ゼントしたが、彼女に編んであげたいと思ったのは、  
甘夏柑のジャムを一瓶いただいたから。

彼女のジャムは、サクランボやスモモなども、デパ  
地下に並ぶ高級品より美味しい！レシピは、彼女が試

プレゼントは、簡単に購入できる物ではツマラナイ。  
感動を共有できそうな人には、自分が観た番組をDV  
DやBDにダビングしてお送りすることがある。それ  
で、相手が気に入ってくれば、ダビングの時間ごと豊  
かなものになる。離れていても、観る時間がズレても、  
人生の1〜2時間を共に過ごせたような喜びがある。

そのあとに、感想のメールや手紙をいただくこと、そ  
れを書くために時間を割いてくださったことがまた嬉  
しい。メールや手紙は、書いてから読むまでに時間のズ  
レがあるものの、重なり合う心模様が夏の夜の火花の  
ように煌めき、平凡な日常のひとつを彩ってくれる。  
スポーツであれば、芸術であれば、学問であれば：e t c.  
同じ感動の壺にはまると、いっしょに温泉に入らなく  
ても心までジーンと温まる。恋人にかぎらず、親友で  
も、思い思われる相手がいる人はポジティブだ。

陽に向かい

即かず離れず生きてゆく

君も惑星

我も惑星

『表象』第19号 短歌十首

「かりそめの世にて」より

最近、ある会合に出た時、自分が何故ここに居る必要があるのだろうと疑問に思った。若い頃なら、会場の花という役目もあっただろうが(笑)、もうとつくに卒業したはず。

十数人が集まって会議をするには、一つの目的のために、それぞれの時間を譲り合い共有しなければならぬ。その意識が無いままでは、有意義な会議は成り立たない。招集をかける文書に「欠席の時は連絡を」とあり、自分の予定を優先させてかまわないと解釈できるが、半数も欠席では繰り合いをつけて出席した者は虚しいばかりだ。

欠席が多くても支障がないのは、すでに結論が出ている会議だから？それなら、結論を考えた人たちだけで進めていただければいい。こんな自分でも何かの役に立てるなら…と出向いた熱気が、スーッと冷めてしまふ。何も存在意義を感じない員数としての役目に思えて、辞退させていただくことにした。アンケート等で、職業の欄に「無職」と記入する専業主婦にだって、「予定」はあるのだ。

灯籠に魂ゆらゆら十人十色

ぶつかり 留まり また動き出す

別々の寿命を生きている人間同士が、いっしょに何かをするためには、互いに自分の時間を与え合わなければならぬ。人と人は、それぞれの「予定」をすり合せて関係を保ち続けている。

体力が余るほどに回復した今年の夏、夜遅くまでの外出を決行した。花火は、当日の天気が成否に影響するから、当日の風まかせだ。予報をぎりぎりまでチェックして、夫婦で「よし、行くぞ」と立ち上がった。

大石田町の花火大会は、フィナーレの20号玉十連発が圧巻。ほどよい川風が名残りの煙を散らし、月齢28・3で月明かりも邪魔をせず、小さなデジカメでも鮮やかに輝きを写し取って持ち帰ることができた。

最上川の川面をゆらゆら流れゆく灯籠の列を眼下に、天空に咲き乱れる炎の華を見上げる。大きなスタマインの相合傘に包まれ、堤防の大観衆の笑顔がパッと輝く。生きている…その有り難さに拍手を送った。たった二時間のために、残暑厳しき夜をここまで駆けて来るのは、普段は眠っている動物的な本能のせいかな？あちらこちらから歓喜の雄叫びが湧き上がった。

花火なんぞクダラナイと一蹴する男だったら、出会ってから三十五年の間、お付き合いできなかっただろう。結婚する際、仙台の式場の神様の前で「今日のこの佳き日、夫婦の契りを結び、一家の幸福と子孫の繁栄を計るよう努力します」という誓詞係の人から手渡されたものを大真面目に読み上げたが、夫婦は、努力だけでは続かない。世間を見渡すと、愉快に長続きしている男女は、他人から見たらクダラナイ時間に、理屈抜きの本能でびつたり繋がっている。

街を抜け出し

炎の華に会いに行く

のびのびと野を駆けまわる

獣だった頃の自分に会いに行く

『てん』第43号

詩「炎の華」終わり四行

——と、長々書いている時間こそ「もったいない」かな？いや、私にとっては、酷暑の一日を乗り切るためにスタミナドリンクを飲むような朝飯前のひとときだった。読んでくださった皆様、「もったいない」時間を分けていただき本当にありがとうございます。

夏の暑さが「もったいない」と、今年はじめて庭に茄子を植えてみた。毎朝三、四個ずつ食べごろになるので重宝した。採れたての新鮮な茄子は格別。植えっぱなしではこの豊作はなかったわけで、夫が手をかけてくれた分、妻としては、あの手この手で料理して食卓に並べる。飽きないよう工夫するうち新メニューも生まれ、食養生で夏バテを吹っ飛ばした。

盛りを過ぎた茄子の脇で、豆名月を目指す秘伝豆がすくすく成長している。茄子は、頃よく余分な枝を切り落として肥料を施すと、秋口には新芽が伸びて再び花を咲かせ、じつに色艶のよい実をつけるぞうだ。(秋茄子は嫁に食わずな)というほど美味しい。今朝も、パソコンが立ち上がるまでの間、窓を開けて「おはよう！まだまだこれからだね」と、茄子たちにエールを送った。

いそいそと五十路を下り呼んでみる

「ばあちゃん」「ばあば」「まりえちゃん」…かな

# ぐうたら草

## ◎ 菊地隆三

一つの真理である

### 百二十段

恐竜が絶滅したのは、今から六五〇〇万年前、白亜紀末にメキシコ・ユカタン半島に小惑星が衝突したためだということが、殆ど確定だと言われる。この時、同時に全生物の六割が絶滅したという。

惑星は直径十五キロほどの小さなものだが、その衝突のエネルギーは広島型原爆の十億倍というから「あな、恐ろしや」の馬鹿力である。

今では危険な惑星は殆ど確認され、常時観察されていて、もし衝突の危険性がある時はその前に壊してしまいう技術もあると言われている。

しかし人間のやることだから失敗もあり得るだろう。もし失敗したらと考えると、眠れなくなる。「杞憂」という言葉も、納得いきそうな気がする。

でもいつ起こるか分からないことを、今にも昇天しそうな老人が心配するのも、まさに杞憂そのものの馬鹿げたことである。

それよりも美しい星空を仰いで、おいしい酒でも飲んでいられる方が賢明とすべきであろう。

星一つ 今燃えつつ 流れけり (虚子)

### 第百十九段

朝に道を聞いたからといって、夕べに死ぬのは勿体ない。

道を聞き知ったのだから、その人は、夕べに喜んで美酒でも傾け、ゆっくり寝た方がよい。

翌朝、目を醒したら、道を聞いたのは夢でなかったのか、その道とはどんな道だったか思い確かめ、間違いないと正しい道だと確信したら、また酒でも飲んで眠ればよい。

これを何年か続け、その道を完全に自分の物にしたら、世にいる多くの迷える小羊達に正しい道を教え救って貰いたい。

その後、ゆっくりゆっくり死んで行って貰いたい。ただし私みたいな盆暗は、いつ死んでも誰もなんとも思わない。「ぐうたら ほんくら ごくらくとんぼ」

### 第百二十一 段

カナダ・バンクーバーの冬季オリンピックのフィギュア・スケートに出た浅田真央ちゃんというとてもかわいい選手がいた(今も活動しているのか、私は、知らない)。

テレビは殆ど見ないが、孫達に誘われて真央ちゃんが滑る時、一緒に見た。

一生懸命滑って、見事、銀メダルを貰った。

本当は金メダルを取るだろうとの前評判だったらしい。真央ちゃんは銀メダルで悔しくて泣いているので、かわいそうだった。孫達も皆かわいそうだと涙を流している。私も涙が出た。

私の孫達は、私に似ず、スポーツはかなり出来る。でも、幸い、県大会などには出るが、オリンピックまで出なくともよい。オリンピックなどには、出て貰いたくない。見ているだけで、こちらの命が縮まる。孫達は、じじ・ばば孝行なのである。

### 第百二十二 段

何も努力しなくとも、もてもてこまるような男や女は、恋の真の喜びを知らずに、一生終わるかもし

れない。

相手に尽くしても尽くしても、思い焦がれ思い詰めても、全然振り向いてもくれないような辛い思いをした人こそ、もし相手が少しでも振り向いてくれたり、優しい言葉の一つでも掛けてくれれば、天にも昇る幸せな気分を味わうだろう。それはほんの一時であって、また辛い思いに突き落とされるかもしれないが、その一時が宝物となる。

「豚の恋患い」「醜女の深情け」「磯の鮑あわびの片思い」などと、一概に低く見てはならない。

こういう人達の方が、ずうっと深く、恋の喜びを知っている。

### 第百二十三 段

人の悪口を言いながら酒を呑むのは、とても楽しいという。

しかしそれは止めた方がよい。必ず、自分に返って来る。

酒を呑んでも、呑まなくとも、人の噂話はしない方がよい。人の価値、値踏みはしない方がいい。

六十歳近くもなったら、人のことなど、どうでも良い。自分のことさえ、しっかり考えていれば良い。人に誹い(そし)られても構わない。

これは自己中心とは異なる。人と群れないということである。自立し、自由な世界を持っているということである。そこを自分の好きなように飛翔する。これほど、楽しいことはない。

#### 第二百二十四段

「過ちは好む所にあり」とか。  
よく泳ぐ者は溺れ、乗馬の得意な人は落馬骨折する。だとすれば、無芸大食も、そう悪くはない

#### 第二百二十五段

鉄筋コンクリートの近代建築物は、一見頑丈そうだが、せいぜい百年程度しかもたないらしい。  
我が家のご先祖様から授かった古い家だが、杉の木造家屋で既に二百年近くなっている。  
三十年ほど前、廂ひさしや根太の修理はやつたが、棟梁によると、これからも百年は大丈夫だという。随分と長持ちするものである。  
正直言つて、風通しは少々良過ぎるが、春夏秋冬を肌で感じ、解放的で住み心地は大変良い。多湿や乾燥にも、自然に良く反応する。

坊さんも八十歳も過ぎて枯淡の風姿に達すると、その前に座つただけで、心の安まる思いがする。  
ロレックスの金びかの坊さんや美食で糖尿病で脂ぎつた坊さんは、余り有難みがない。

#### 第二百二十七段

建物などは余りにも完成したものを建ててしまうと、あとは亡びの道を辿るだけだという。だから、わざと一部見完成にしておくとう亡びに至らない。  
知恩院の屋根瓦は一部未完成のまま積み重なつて、天辺に残つたままである。東本願寺の正面の柱の龍の顔もまだ眼の入っていない未完成のものであるという。  
建物など、特に人間などは、何も未完成だからと言つて気をもむ必要はない。未完成でも誰かがそれを引きついでくれるかもしれない。未完成は完成へのエネルギー源である。

#### 第二百二十八段

最上三十三観音第一の札所である鈴立山若松寺の里見教田大僧正様は、私の大いに尊敬する御方であった。私は何回となくこの寺にお参りしている。  
ある年の秋、その寺の山に登ると境内の巨大な松の

「杉」という木は（真直ぐ）という意味から名付けられたという。杉の木の家に住むと、性格も素直に真直ぐになるかもしれない。私も杉の家になく住みついて、若い頃の少々ひねくれた考え方も、少々直つたような気がしないでもない。これは杉の功より、年の功かもしれないが……。

日本では、今、沢山の杉林が間伐手入れもされず放つて置かれている。すると杉の木が弱つて枯れそうになる。杉は子孫を増やそうと杉花粉を大量に撒き散らすらしい。  
工場で作つた規格品の新建材をべたべた張るだけの薄っぺらな住宅ばかり作らないで、有り余るほどの杉の木をどんどん使つた、住み心地の大変良い、日本の伝統的な木造家屋を沢山作つて貰いたい。すると、街並も、日本らしい風格のあるものとなる。

このことに、今すぐ力を入れて急がないと、伝統的な日本家屋を作れる腕の良い大工さんがいなくなつてしまふ危険性が、目の前に迫っている。

#### 第二百二十六段

松の木と坊さんは古い方が有難みがあると言われる。松も古木になると、その松籟も深みがあつて心に沁みる。

古木が二日前の台風で根元から無惨に倒されてしまつているのに出会つた。前から見馴れていた松の大木なのでとても心の痛む思いだつた。  
いつもの如く寺にお参りしてから大僧正様からお茶を頂いた。

「残念でしたね。あの松の大木」

先程見た松の姿を思い浮かべて、私は口にした。

「まあ、この鈴立山とて、この世ですからな」

大僧正様は穏やかな口調で言われた。

私はこの世、即ち、現世の真実の姿を教えて頂いたように、とても有難い気持ちになった。

#### 第二百二十九段

前段の松の風倒木は大板に製材されて寺の北側に陰乾しされていた。

私は大僧正様が書や篆刻の並々ならぬ技の持ち主であることを知っていたので、松板の充分に乾いた数年後、厚かましくも大僧正様から書を彫つて貰うことを願ひ出た。

二年ほどして寺から連絡があつた。

御伺いすると、六尺もある松板の剥ぎ面に見事な四字が彫つてあつた。

曰く、〈萬法流転〉

「この世の総ては、流れ転がり消えて行く。だからこそ、今の一瞬、今日の一日を大切に生きよということですね」

大僧正様はそう教えて下さった。時に大僧正様は八十八歳。その後十年ほどして遷化せんけなされた。

この影書は私の宝物となったが、今は私の花畑にある粗末な茶飲み小屋に掛けられている。

私は花を見、雲を見、茶や酒で身を浄めながら「おんあろりきやそわか」と称えつつ、わが身が「萬法流転」の法則に包まれる日に備えている。

註（あんあろりきやそわか・聖観世音菩薩真言）

### 第三百十段

記録は必ず誰かによって更新される。

一番前を走っている人は、必ずいつか追い抜かれる。追い抜かれまいとして頑張っている人は、命の縮む思いだろう。

絶対に誰にも追い抜かれない方法はただ一つ。のんびりあたりの景色でも見ながらびりで走ることである。のんびりのびりが一番である。

### 第三百十一段

寒い季節には、雪が降りぴりりと寒く、暑い季節には、油蟬が鳴き入道雲が出て汗がぼたぼた落ちる。それが日本のよい所である。

年中常春の国などは御免蒙りたい。

「寒い」だの「暑い」だのと、天に文句を言っはならない。

### 第三百十二段

スペインやイタリアでは「仕事は？」と聞かれると、堂々と「泥棒」と答える奴がいるらしい。

以前、スペインへ二十人ほどの団体ツアーに参加した時のこと。マドリッドのプラド美術館に入ることになった。その時一組の初老の夫婦が以前にも見たかと別行動をとり、広い道向かいの喫茶店で待っていると言い出した。私たちは美術館に入り、ゴヤやベラスケスに夢中になっていた。

時間で外に出ると黒山の人だかりがして、見ると中央に先程の初老夫婦が裸同然の姿になって震えている。

聞くとところによると、コーヒをゆっくり飲んで美

術館の方に戻るため地下道に入った途端、五人組の男に囲まれ、刃物を突き付けられ後ろから首を絞められ気絶してしまった所を身包み剥ぎ取られたらしい。人通りもあつたのだが怖がつて誰も助けてくれなかったらしい。

白昼強盗に合った夫婦には気の毒だが、それにして、プロ中のプロと言える仕事ぶりである。

最近ソマリアで海賊が横行しているが、彼等は手荒ではあるが、品物や身代金を取りさえすれば、人の命を奪うようなことはしないという。

それにひき較べ、日本の泥棒、強盗は、たった二、三萬円の金を奪うため簡単に人を殺してしまう。

プロとはお世辞にも言えない情けない話である。

### 第三百十三段

（パワ・ハラ）とは少しも偉くないのに部下に威張り散らして、嫌味を言う類の言行をいう。威張り散らすのは男にもいるし、女にも、勿論、いる。

言われた部下は悩んで鬱病になって自殺する人もいる。パワ・ハラをやらかす手合は、きつと己に自信がなく、本当は弱虫なのだから何も恐れることはない。言いたい奴には言わせておいて、心の中で笑って無視していい。

### 第三百十四段

しかしそうは出来ない善良な人もあまたいるので、矢張り、パワ・ハラは許せない。

（パワ・ハラ）に較べて、（セク・ハラ）はかなり厄介である。

相手の心情を度外視し一方的に劣情を催して付きまとい、それを強要したりするのは許せないのは当然である。

しかし元々二人の間には多少なりとも恋愛感情があったとは言い切れない場合が多い。そして相手に対して隙を見せたり甘い所を見せたりしている場合もある。それが何等かの切っ掛けでこじれてしまつて、セク・ハラとして問題にされてしまう。

セク・ハラは圧倒的に（男から女へ）の事として問題にされる。不平等な気がしないでもないが、矢張り、女の方が弱い存在というのだろうか。男の方が劣情を催し安い性（さが）を持ち合わせているのだろうか。

世に男女の仲のことは不思議なことばかり多い。空飛ぶ能力すらある久米の老仙人ですら、雲の上からの覗きのセク・ハラで失敗している。

女の髪の毛は象をも繋ぐというほど強い力を持っている。男は自分の立場も忘れてついついそれに繋がっ

てしまつて、身を亡ぼしてしまふ。愚かと言えば愚かだが、あわれと言いたいがもする。あな恐ろしきは、男女の仲である。セク・ハラとて、その源はここにある。

### 第三百二十五段

正しい事を言う時は、余り大きい声で言うなという。良薬は口に苦し、良言は耳に痛しの故である。一方、大声で、時には拡声器で言われるようなことは、大抵、詰まらない、または正しくないことばかりである。政治家の政見発表がその見本である。

### 第三百二十六段

明日にでも出来そうなことは、明日に延ばした方が、身のためになる。

### 第三百二十七段

漢字を間違つて書くと恥ずかしいので、新聞広告で(大文字電子漢字辞書)というのが見付かり、視力低下傾向の老人には助かるし、また値段も大変安いので注

文人手した。

早速引いてみると余り見た事のない奇妙な字が沢山出て来る。こんな漢字があつただろうかと思つて調べてみると、発売元は日本社だが「メイド・イン・チャイナ」であつた。

悠久の文化歴を持つ漢字の国(中国)を私は大いに尊敬するが、最近の奇妙に簡略化した中国字は全くいだけない。

この頃反日が盛んで日本人蔑称の「ジャップ」の意味で(小日本)というらしいが、この前の尖閣諸島デモの時にはプラカードになんと(小二本)と書いてあるのは噴き出してしまった。それなら日本人は日本人らしく二本足で堂々と進むほかないだろう。

本家本元の中国人がだんだん正しい漢字を書けなくなつてゐるらしい。残念なことだと思つう。

日本では平成二十二年になつて(改定常用漢字表)が発表されたが、その中に新しく(傲・嘲・藪・璃・籠・彙・鬱・楷・毀・稽)など百九十六字が追加されたが非常に有意義なことだと思つう。

今の中国の若い人たちは、たまに日本に「元祖本物漢字学習ツアー」など計画してみてもどうかだろうか。

大地は揺るぎ、海には大津波が起こり、天には大竜巻、大暴風雨が起こる。

### 第三百三十八段

それは、時、場所を選ばない。極度の一極集中大都市の東京などに大災害が起きたら阿鼻叫喚の地獄絵巻が繰り広げられるだろう。

そしてこの事は必ずや早晚起きてしまうのである。その時、日本は壊滅的打撃を受けてしまうだろう。考えると、ぞつとしてみよう話である。早く集中を止めて分散を考えるべきである。

そもそも東京など、息苦しく、住む気にはなれない。山紫水明の山形あたりは移り住んで、のんびりおつとり暮らすのはいかがか。災害は皆無とは言えないが、逃げる場所はいくらでもあるし、少なくとも餓死することはない。隣同士で助け合う人情もまだ残つてゐる。

### 第三百三十九段

商人は儲けることが美德である。人を騙してぼろ儲けをするのは許せないが、大いに頭を使い体を使つてどんどん儲けるのは、大変、結構なことである。

値引き合戦など、すべきではない。互いに首を絞め合うだけ、愚の骨頂である。

手のかからない安物は安く売り、良い品物はそれなりに高く売るべきである。

### 第三百四十段

悩みに悩んで解決できる問題なら、いくら悩んでも良いが、いくら悩んでも解決出来ないことなら、悩まない方が良い。

例えば(不死鳥)になることなど、いくら考え悩んでもどうにもならない。

### 第三百四十一段

黒揚羽蝶はこの頃余り見られなくなった。しかしこの蝶は余りにも妖艶で魔法使いのおばさんの変身のよう、少々、薄気味悪い。それにこれの幼虫である柚子坊(ゆずぼう)はよく山椒に付くが、これまた触るのさえ気味悪い。

しかしこれ等は神様がそう作ってくれたのだから、こちらがあれこれ言うのは罰が当たるだろう。黒揚羽から見れば、人間などは、この世で最も奇つ怪な存在であろう。

紋黄蝶、紋白蝶などは有りふれた蝶だがかわいい。菜の花畑には、紋白蝶が、最も似合う。

ちょう

ジュール・ルナール

二つ折りの恋文が 花の番地を探している

## 第四百十二段

弘法筆を選ばずと言うが、あれは嘘である。弘法は筆を非常に大事にした。その日の気分によって使い分けしたらしい。使い終わった後は丁寧に洗ってやった。その日手にしなかった筆は必ず手にとって、一度は撫でてやったという。誠に優しい人なので、良い筆が自然に手元に集まって来る。

筆の方が、弘法を選んだのである。

(つづく)

## 第四百十三段

中国が簡略字体を並べるようになって、折角の母国の字を台無しにするのは勿体ないと思っていたが、一九八九年、鄧小平という頭の良いリーダーが〈韜光養晦(とうこうようかい)〉と言い出した時は、さすが漢

字の本家の国だと、大変感心したものである。

〈韜〉は「つつむ」、〈晦〉は「くらます」の意で、才能があっても覆い隠して、目立たないようにするということらしい。

この〈韜光養晦〉の後に〈決不当頭〉という四字が続く。決して先頭に立たないという、実に奥ゆかしい気持ちを示している。そして中国は徐々に世界第二の大国に成長して行った。

しかし現代の中国は、この〈韜光養晦・決不当頭〉の路線を放棄しつつある。

巨大空母などを造り、威丈高に周辺の国々に圧力をかけている。

古来、中国は偉大な国であることは、誰しも認めている。泰然自若としていればそれで良い筈である。

# 象徴(シンボル)への航海

くもじーの世界

◎ 鎌 上 宏

## 一、本論『シンボルへの航海』

私は象徴の海原に漕ぎ出しながら、自らの迷妄を一枚一枚剥いでいきたいと考えている。しかし、書き留めたことは、おそらく明日には陳腐な古びたものになるだろうことはわかりきっている。

第二章 手の変幻への繋がりとしての本体、その周辺

(金色ということ)

一 手の変幻、ウォーリーのこと(その一)

今年の五月五日子どもの日に「ウォーリー」のアニメ映画がNHKBBSで再放送された。「ウォーリー」はデズニープクチャーズ製作になる二〇〇八年のアメリカ

カ映画で、主人公が「スターウォーズ」に登場する金色の人型ロボットC3POの相棒である不器用なスペースシャトルのキャタピラで歩く頭脳ロボットR2D2に雰囲気似ているキャタピラロボット、ウォーリーの物語である。ただR2D2とはっきり異なるのはウォーリーが双眼鏡のような眼をもち、そして手を持っていることである。ウォーリーが登場する舞台は、R2D2のスターウォーズ時代の頭脳ロボットとしてはなく、その果ての廃墟と化しつつある地球のゴミ処理ロボットとして生産されている二九世紀の地球である。字幕解説にはこのようにある。「原作アンドリュウスタントン、アカデミー長編アニメーション映画賞受賞」で、「地球再生化計画」ノアの方舟計画、つまり地球が愚かな科学文明の行き着く果てに廃墟と化しつつあるために、地球外に「緑の生命体」を求め、足腰が弱くなった人間たちをベッドに乗せながら宇宙旅行に出る彷徨うシーンが綴られて物語は展開する。ちょうど「二〇〇一年宇宙の旅」で宇宙船乗組員が、宇宙旅行の仕事の合間に足腰が弱くならないように巨大な円周を常にランニングするという情景をベースに上書きしている。「ノアの方舟計画」の乗組員は全員が自分の足で立つて歩くことなど出来ないほどに足腰が弱ってソファに乗っかって移動するという時代設定である。ウォーリーの相棒としてクリオネのような、イヴ

というロボットが登場する。興味深いのは、ウォーリーが何度も何度も手を差し出そうとする仕草が繰り返される場所である。ウォーリーはその「イヴ」ロボットの手が気になってしょうがない。接近すると、イヴの手を求めて、おずおずと手を差し出し、指を絡ませようとしては果たせずにいる。物語は、廃墟と化したつある地球から宇宙船が飛び立つときに、ブーツ状の植木鉢に一本の緑の苗「いのち」がその船体に紛れ込み、それを追ってゴミ処理ロボットのウォーリーが慌てて宇宙船に必死にしがみついて乗り込み、宇宙の果てに緑のいのちを求めて地球の再生の使命を帯びて飛び立つノアの方舟のミッションを戯画的にめぐり出すストーリーである。(「ウォーリー」つづく)

## 二 平山郁夫の絵画

二〇一一年の冬に「仏教伝来の道々平山郁夫と文化財保護」(文化財保護法制定六十周年記念)と題した特別展が開催された。私の初めてのインド旅行、東北大地震の年のことであった。特別展を鑑賞しながら途中で足を止めた。それはあの壮大な三蔵法師の歩む中央アジアの高原地帯の絵ではなく、インドの密林の暗闇の中で光り輝くブツダの瞑想の姿、修行僧たちに法を説くブツダの姿であった。とりわけ漆黒に近い深緑の

林の中で、坐禅するブツダは光り輝いた中に浮かび上がるように描かれていた。寺院の中に本尊として安置されている釈迦如来像ではなく、現実的な木々のなか、平常空観の中に、ブツダが光り輝いて描かれていることに、立ちとどまって見入らざるをえないような違和感があった。あらためて、お釈迦様が「金色」であることに刮目したのである。

※

私は、平山郁夫について著名な名、そのモチーフ、思想的スケールをある程度知っているわりにはその絵そのものに疎かった。どちらかと言えば、西洋絵画、西洋の古典から近代にかけての西洋絵画を好んで鑑賞した自分の嗜好外であった。しかし、光り輝くブツダの絵には、三蔵法師の悠に悠に遠い求法の旅とは異なった迫り方の現実が描かれていた。深い深い深淵から、自分が知り得なかった何ものかの焦点が、ずれたり合ったり勝手にカメラのオートフォーカスがピントを合わせるために難儀しているような感覚にとらわれた。しかし、そこでピントはあわずに、何かはつきりさせなければいけないものがありそうだという感覚があった。そして、密林の中にお釈迦様が描かれたそれから平山郁夫の「建立金剛心図」、「出現」、「天堂苑樹」の小さな絵はがきを買って帰路について。

その焦点をを合わせるべき現実とは、なにであろう。

## 三 世界の神々と仏陀の金色

仏像の造像ということと同時に、この稿で格闘するテーマは「金色」と言うことである。

「仏像」の「金色」という問題がある。

キリスト教など他の宗教に神の偶像がない(ブツダが「神」かどうかは検証するまでもなく実在の人物であることをふまえておく)。そのなかで、「古代人の金色感覚」について「聖書」に出てくる色彩としての金色を調査したところ、金―545回、銀―322回、青―237回、白―109回で以下100回を下回って紫―056回が続くという調査がある。「聖書には136回「偶像」という単語が出て来るのであるが、その殆どの場面は偶像崇拜禁止である。旧約聖書には106回、新約聖書には30回の偶像崇拜を禁じている。」とネット書き込みは述べる。

結論的には、キリスト教における神は、①造形されない。②同時に金色に塗られない。

ところが、「仏陀の三十二相八十種好」ということがあり、仏陀には普通の常人に見られない足下安平立相(第一相、そくげあんびょうりゅうそう)俗に言う扁平足)などの三十二の身体的な特徴があり、微細な身体的特徴、耳が肩まで届く程垂れ下がっている「俗に福

耳などの八十種の特徴(好)をそなえているとされる。大特徴の「相」と微細特徴の「好」を併せて「相好」、転じて顔かたち・表情をもっている。その第十四番目の相に「金色相」、第十五番目に「丈光相」がある。つまり、身体手足全て黄金色に輝き、身体から四方各一丈の光明を放っている(後光、光背)のである。

※

ゴータマ、ブツダ。その「仏像」は、三密、すなわち「身口意」を秘めており、ゴータマの「身体」としての仏像は、大きくは立像、坐像に区分けされる。

仏像の容姿、修法(印相)、観念はこの「三密」一体を顕現している。

詳しくは、「三密」の「身」、「口」、「意」のうちに、まず「身」金色相を見ていこうと考えている。

## 四 ブツダ、鹿野苑(サルナート)での「初転法輪」

ブツダは、ともに苦行した五人の比丘(出家者)のいるベナレスに向かい、最初の説法をした。仏陀の顔色は以前と違って純潔で、黄金のような光明を放っていた。

「出家らよ、世の中には修行者が偏つてならない二つの極端がある。第一は官能の赴くままに欲望に耽ること。第二に自分で自分を苦しめる苦行である。如来

はこの二つの極端を捨てて中道を悟った。中道とは八つの聖い道、八正道……正しい見解、正しい言葉、正しい行為、正しい生活、正しい努力、正しい思念、正しい瞑想である」「出家らよ、これは苦聖諦である。誕生・老・病・死は苦悩（四苦）である。憎らしい者に会うことも、愛する者に別れることも、欲しいものが手に入らないことも苦悩である。要するに人間の存在はすべて苦悩（四苦八苦）である。……これは苦集滅諦である。……これは苦滅聖諦である。……これは苦滅道聖諦である。……この四聖諦は今まで説かれていない私自ら悟った法である。苦諦は弁え知るべきものとして知り、集諦は断つべきものとして断ち、滅諦は証るべきものとして証り、道諦は修べきものとして修めた。こうして私は仏陀となったのである。これは（輪廻を離れた）私の最後の生涯であり、もう生まれ変わることはない」ここに五人は釈迦の説法を受け入れ、悟り、「生まれるものは必ず滅びる」という理法を悟って、この世に釈迦を中心とする六人の聖者が誕生した。やや迂回することになるが、進めたい。

※

ゴータマが悟りを開いた、成道したのは、五人の修行僧と袂を分かったネーランジャヤ河の畔、ブツダガヤである。梵天の説法してほしいという願いを聞き入れて、自らの悟りの境地を、誰に話そうか、報告しようかと考えたとき、アーラーラ仙人が思い浮かんだ。

き私は『この法は厭離に赴かず、止滅に赴かず、平安に赴かず、智に赴かず、安らぎに赴かない。ただ無所有処を獲得しうるのみ』と。そこで私はその法を尊重せず、その法にあきたらず、出て去った。」ここでいう『無所有処』ということについては、稿が進んで述べることにしたい。

そして更にゴータマ・ブツダは、無上の絶妙なる境地を求めてウツダカ・ラーマブツタの所に赴いて同じく口上を述べ、ウツダカ・ラーマブツタの宣説する『非想非非想処』の法を知り証し体現した。そしてまた『この法は厭離に赴かず、離欲に赴かず、止滅に赴かず、平安に赴かず、智に赴かず、正覚に赴かず、安らぎに赴かない。ただ非想非非想処を獲得しうるのみ』と。そこでブツダは、その法を尊重せず、その法にあきたらないで去った。（釈尊のパーリ語聖典回顧談をひく村元の所説）ここでの『非想非非想処』ということについて同じく稿が進んで述べることにしたい。釈尊は、修法修行の段階でアーラーラ・カーラーラーマ、ウツダカ・ラーマブツタの両バラモン仙人の所で最初期仏教の禪定を修したという。

釈尊は、その後ウルヴェーラー、後にブツダガヤで修行し、「アシヴァッタ樹の根もとで悟りを開いたのであった。時は、南方仏教伝「ヴァイシャーク月の満月の日」太陽暦五月満月の日。インド暦によると第二の

うかと考えたとき、アーラーラ仙人が思い浮かんだ。アーラーラ仙人というのは、ゴータマ・ブツダが教える求めて訪ねた仙人である。「私は出家して、善なるものを求め、絶妙なる寂靜の境地を求めつつ、アーラーラ・カーラーラーマのいる所にいった。そしてこう言った『アーラーラ・カーラーラーマよ、私はあなたのこの法と律とにおいて清浄行を行おうと願うのです。』と。アーラーラは無所有処を宣説し、私にこのようにいった『賢者よ、ここにいなさい。この法は、そこにとどまるならば、智者は久しからずしてみずから師と等しいものをみずから知り、証し、体現しうだろう。』と。そこで私は久しからずして速やかにその法に達するこゝとが出来た。そしてこう思った『アーラーラにのみ信仰があるのではない。私にも信仰がある。アーラーラにのみ精進が、念が、精神統一が、智慧があるのではない。私にもまた精進、念、精神統一、智慧がある』。私はこう言った『尊者よ、じつは私もまたこの法をみずから知り証し体現しているのです』。カーラーマは言った『私が知っている法を、あなたも知っておられる。あなたが知っておられる法を、わたしも知っている。尊者よ、さあ来たれ。われら二人でこの三〇〇人の衆を統率しましょう』と。このようにカーラーマは、私の師でありながら、弟子である私を自分と同等において、大げさな尊敬供養によって私を供養した。そのと

月で、漢訳仏典では二月八日と記す。シナ（周）暦法は陰暦十一月を第一月として数えるので、第二月の八日つまり陰暦十二月八日、日本ではそれを受け釈尊成道の日を十二月八日を祝う。

※

悟りを開き、その悟りを説くか説くまいか躊躇していたとき梵天に勧請され、世界のために説法をしようと考えたのであった。「私はまず第一に誰に対して法を説くべきであろうか。誰がこの法を速やかに理解するであろうか。」と。そこでアーラーラ・カーラーマは賢者で、識見があり、聡明で、長い間無垢の性の人である。最初にアーラーラ・カーラーマに法を説こう。」と。ところが、アーラーラ・カーラーマは死んでから七日と知った。次に誰に説こうかと考え、ラーマの子・ウツダカに説こうと考えた。ところが、ウツダカ・ラーマブツタは昨夜亡くなったことを知った。

そこで五人の修行仲間を思い出し、彼らに話そうと考えた。彼らは修行の聖地とされるバナラシー（ベナレス）、仙人の住処・鹿の園にいない。

そこから五人の修行僧がいるベナレス（サルナート近く）まで直線で二〇〇キロ、街道の距離で二六〇キロとされる。ゴータマは初転法輪のサルナートまで七日で歩いたとされる。一日に四十キロメートル近くを歩んだことになる。

※

光り輝くような「光明」は、この胸を躍らせるような、世界を統一する無上の悟り、法を早く仲間に教えたい」という内的要求から発せられている、と考えるのは杉山二郎である。世俗の王位を捨て、武力に依らない理想の法を悟った輝きを杉山は、人間ブツダの「澆刺感」と解釈するのである。

## 五 「金色相」「丈光相」の起源

しかし、『極楽と地獄』（岩本裕）は、考察している。

『光の理念・光明思想はインドの宗教では非常に希薄である。後に展開したヒンドゥー教の主神であるブラフマン、ヴィシュヌヌ、シヴァの三大神は光明で修飾されることもないしまたこれらの神は光明の存在でもない。』と。また、『ヒンドゥー教系の記述と大乘經典にみられる光明思想や仏像における光背の起源とを結びつける宗教史的な背景は、なにもたどれない。』と結論づけている。

しかし、細部の検証を重ねながら次のように指摘する。『ブツダや後世に展開した多数の仏が光明で装飾された光明の存在となった事実、インド仏教美術の面からも跡づけることが出来る。大乘仏教が起こった頃にガンダーラの仏教美術が栄え、ギリシア芸術の影響

の下に仏像が数多く彫刻された。しかし、世紀前一世紀のころから後一世紀の中頃までの仏像には、光背がない。』

『ところが、タフティバーヒー出土の仏像には、円形の光背をもつものがあり、インド美術史家の見解では世紀一世紀後半から二世紀初めに属するとされる。』重要な探求が続く。『二世紀に属するマトゥラーの菩薩坐像は光背があり、そのうち北西インド一帯における仏像はすべて光背をもつようになる。』

光明思想と、光背の関係がはつきりと結びつけられ始める。

『それでは、大乘仏教における光明思想なり二世紀以降後の仏像の光背の起源は、どこに求められるのか。』『われわれは大乘仏教が成立し仏像が彫刻されるに至った世紀前二世紀ごろから後二世紀ごろに西北インドにおいて、王者が神格化され、頭のまわりに光輪があり、あるいは光線を放射している像を見ることが出来る。その最も著しい例は、仏教の外護者として有名なクシヤン朝のカニシカ王（二世紀）の金貨の像、さかのほればテオス（神）という称号がつけられたアンティコス四世エピパヌス（前一九五〜一六四）、同じくヴィマカドフィセス王（一世紀）の金貨である。』と。

岩本は、その光明をさらに辿り『頭上に光芒を放つ像は、小アジアのボカズケイにあるシリアのアンティ

オケス一世（前二八〇〜二六二）の建立したミスラ神の浮彫に見られる。』としている。『ミスラ神はイランにおける太陽神で、イランのゾロアスター教の聖典『アヴェスタ』の中では勝利者とされ、フヴァルナ（栄光）を付与された者であり、フヴァルナと一体となった者として尊崇された。彼の頭上に輝く光芒は実はこのフヴァルナの表象である。』『勝利者としてフヴァルナ（栄光）をシンボルとするミスラ神の信仰が、西暦紀元前二世紀ごろから西北インド一帯に広まっていた

事実を考えると、セレウコス家のアンティオコス四世エピパヌスにはじまり、クシャーン帝王のウイマ・カドフィセス王やカニシカ王の像に見られる頭上に放射した光線が、ミスラ神のフヴァルナの表象であることは明らかである。』『その頃に展開し始める光背光輪がそれを模したものであること、すなわちミスラ神のフヴァルナに起源を有することは疑いをえない。』と起源を認めている。さらに『その背後には、ブツダを精神世界の王者として、転輪王―天から輪宝を奉持して四方を

征服し、正義をもって国土を統治し、人民の生活を安定させる理想の君主―にたとえる仏教徒の意識があったことは明らかである。』と岩本裕は述べている。意義深い研究で極めて貴重な指摘である。

※

多くの文献は次のように述べている。

ともに行動していた修行僧らは、ゴータマが苦行をやめてスジャータから乳粥を受けたのを見て袂を分かった。そして、サルナートで、ゴータマがやってきても厚遇せず、冷遇しようと語り合っていた。

それなのにとりかたである。迎え入れた五人の修行僧が、昔のよしみで仲間をもてなしたのは、やってくるゴータマがいかにも威厳に満ち、神々しさを備えていたからついつい厚く敬ったということであつたらしい。

杉山二郎は、『仏像―仏教美術の源流』の中で、『金色相』の起源を次のように語っている。

「仏像の多くが金箔や塗金で金色相を表現している。しかし、彼の皮膚は金色・鬱金色であったのだろうか。そうではあるまい。精神生活が高揚澆刺とした人間の表情、恋をしている乙女の表情は、明らかに光り輝いている。シャキヤムニコそそうした表情と身振りをもっていたに違いない。それをまばゆい金色で譬喩的に表現したと思われる。」釈尊を人間ゴータマと見た敬いの想像の所産であると杉山は推察する。

しかし「頭光・光背は別の要素が介入してくる。それはどうやらインド起源ではなく西アジアに求められる。」と岩本の説を引用し取り入れている。

岩本のシリアのアンティオケス一世建立のいミスラ神の浮彫にその頭光の起源光を認める研究と、杉山の

人間の精神的高揚感によるという推察とによって、「金色相」と「丈光相」を見てきた。

## 六 靈鷲山での説法

やや余談に亘る。

多くの日本の宗派、仏教徒に親しまれている「般若心経」がある。

『大般若波羅蜜多經』の心髓を収めるといわれているが、般若經典群のテーマを「空」の一字に集約してその重要性を説き、悟りの成就を讃える体裁をとりながら、末尾の陀羅尼によって仏教の持つ呪術的な側面を強調している。

実は「般若心経」は、漢訳、サンスクリットともに「大本」、「小本」の二系統のテキストが残存し、大本は小本の前後に序と結びの部分が増広されている。現在流布しているのは玄奘三蔵訳とされる小本系の漢訳で、現存の『般若心経』はこれを指している。チベットなどに伝わっているサンスクリット原典（大本）に収められているその序文は日本では流布していないが、大本（広本）を一幕もののドラマと宮坂宥洪、玄侑宗久は解釈している。「般若經典」の成立は、紀元一五〇年頃から二〇〇年頃にかけてで、「空」の思想を含んだ大乘仏教の經典である。

かしく登場させる舞台設定として、金色相、丈光相として関与したのかもしれないと想像してみるとまことに心楽しい。

## 七 まとめ

仏教の「瞑想」が、仏陀以前も以後も行われている。しかし、前回の本論第一章でも述べたが、世の種々相の瞑想は、仏陀以後の多くが敬慕のあまりに「仏陀」その人を瞑想したということも、仏像出現の謎を説く諸文献の示すところである。その際に、瞑想された仏陀が、「金色相」「丈光相」であったという想像は、決して「金色・丈光相の仏陀」の起源を考える際に荒唐無稽ではないだろうと思われるのである。

※

二〇一一年、一二年にインド聖地を訪ねた折り、釈尊ゆかりの聖地の大壇、仏塔、あるいは仏像は金色に象られている。釈尊像が金色であるのは現在では儀軌による造り方にもとづくが、仏塔、大壇が所々、箇所々金を押されているのを見る。それは、タイ、スリランカ、チベットなど多くの巡礼者が聖地巡りで祈りをささげ、日頃節約しながら一生の数少ない巡礼の際に、仏陀ゆかりの建造物に金箔を押しつけ、いのる姿があった。日本で言えば、観音霊場巡りに「巡礼札

この教えを釈尊はマガダ国の首都ラージャ・グリハ（王舎城）近郊の仏陀聖地の一つ靈鷲山（グリーングド・クータ）で説いたと云われる。成道したブツダガヤにほど近く釈尊が説法を好んだ鷲の恰好に似た山の頂きは、眼下に首都を一望できる景勝地であった。この山は釈尊が無量寿経や法華経を説いた山として知られている。

時は夕刻であった。釈尊は真西を背にして結跏趺坐し、釈尊の背に沈み行く太陽が後光のように光り輝き、映え渡っている。大勢の出家修行者や求道者を交えた聴衆が参集、常の如く釈尊の説法が始まるのを待っている。「仏説摩訶般若波羅蜜多心経」の舞台考察である。「般若心経」についての詳細はこの際省かせていただく。時のバラモン教徒と同じく釈尊が林中において瞑想修行し、同じく山の頂きにおいても修行瞑想する習わしがあった。寺院たるものはこの「山号」を有するルーツとして垣間見られる。

靈鷲山はまことに景勝地で、眼下に人の営為を悠久の時と遙かな自然のなかに組み合わせ、あれこれと推察する場としては恰好の地だと、修行の者である私は聖地靈鷲山を巡礼して得心するところがあった。

ところで、經典編集は後世のことであるが、夕刻時、釈尊は真西を背にして結跏趺坐するところがあるが、後世の結集、經典編集の中でダイナミックに釈尊を輝をぶつような思いなのだろうと想像する。生前のまばゆいほどの高揚感、没後仏像が象られるまでの敬慕のあまりの後光さすような瞑想イメージ、そして今日にまで及ぶ何物にも代えられないという崇敬の金色相、というのが今の私の志向する「金色・丈光相」についての航海模様である。

# 言葉とのおつきあい

◎大江利知

相手の心に届く

私はいっぱいケガをしていることを  
相手は知らない  
知らないどころか 心にケガをさせるのを  
喜んでいた 楽しんでいた  
私は こういう人達もいるんだと  
ただ黙った  
私は涙こそ みせなかったが  
心は血を流した  
でも 絶対に涙はみせなかった  
私は無口になった  
私は言葉が  
容易に人を傷つけてしまうことを  
知ってしまった  
挨拶はする  
が  
要点を話すようになっていた  
瞳に映るものも  
耳に入るものも  
優しさを求めた  
話す時は言葉を選んだ  
私は季節ごとの風景に

ある日 テレヴィを観ていた

BSの早朝ニュースを

その中で『名言』を読むコーナーがある

テレヴィの その女性キャスターが

読み上げた

「気持ちには伝わらない。

けれど 言葉は伝わる。」

誰の言葉だったか見逃した

しかし いつまでも 私の心に

こだました

私には 言葉で心にケガをした時代が

ある

言葉は一度 吐いてしまったら

戻らない

溶け込むことが好きになっていた

自然界の音色は

耳に心地良かった

私は そんな時に心を解放した

気持ちは 心は ふくれあがった

けれど

話はしなかった

私は変わり者と呼ばれた

私は別にいいと思った

人を傷つける言葉を吐くのならば

沈黙した方がいい

私は あふれる気持ちは

書くことで昇華していた

だから作文と感想文が大好きだった

そんな頃があった

私の心はいつも言葉でいっぱいになる

今は だいたい普通に話をするように

なった

けれど悪口とうわさ話はあまり好まない

私は思うことがいっぱいある

## 母

そんな時のような気がした  
「気持ちは伝わらない。  
けれど 言葉は伝わる。」  
そうか  
そうだったな  
だったら丁寧に使いたいな  
そして こうも思った  
言葉は気持ちも伝わる

降りそそぐ慈雨の如き我が母と  
過ぎし日々を振り返り想う  
時折に枕の上で泣く母は  
何をみて泣く  
何思うて泣く  
左手で必死に染めし花塗り絵  
我が誕生日へと必死に染めし

「またね。」と言う吾の声まねて  
「またね。」と言う

母の言葉は何処へ行かん

「姉ちゃん。」と吾を呼びし日を想う時  
母はいつでも心から呼ぶ

母は今を懸命に生き 耐えている  
我は手紙に「大丈夫。」と書く

母の写真に そつと呼びかける吾の声は  
幼き頃と変わらなき声

左の手 左の足の動く時  
母の心は 今を生きてる

庭に咲く 露草の花をながめ見て  
草取りをする母の背想う

七夕にいつも短冊書いていた  
あの母の字をいつや見られる

「ベコの子 牛の子 まだらの子  
母さん牛によく似た子」

## 花色

小屋の隣で

立ち葵が夏の風にふうると揺れる

幾つも 幾つも 思い出がこぼれる

素知らぬ振りをして季節は包み込む

日々の生活を

そして もう覚えきれなくなる

新しく つくられる思い出たちを

花の紅の色が

おだやかな南の風に溶けてゆく

花だけが知っている

ふと 流れる時間のなか 立ち止まり

そつと幼い日を愛しんだ私を

遠いあの日の思い出に

微笑しながら しずかに

涙をこぼした私を

そうして右手の人差し指でゆるやかに

涙をすくった私を

教わりし歌 口ずさんでいる

動かない右手右足に触れてみる  
幼き我を抱きし手足

幼日の吾を抱きし母 今伏して  
唇でただ「(帰り)たい(会い)たい」と  
言う

夢にみる母は前と変わらずに  
笑っている 立っている

我が母にあげたき着物 写真でみつけ  
心から笑む母にあげたし

## ひとつの決意

私にとって あなた方の記憶とは

時折 こぼれ落ちることがあっても

一生 決して消えぬもの

あなた方の笑顔

私は守り続ける

## 永遠の片羽

——洋子叔母様

亡き義嗣叔父様へ

心配しなくてもいいわ

私は日々を忙しく過ごしている

あなたが空に飛んでいつてから

もう幾年も経って

あなたとの子たちが二人

それぞれの道を歩んでいる

あなたの孫が

もう一人増えたのよ

あなたに見せたかったと娘が言うの

あなたも好きだった 南こうせつを

車を走らせながら聴いているわ

そんな時 ふと

あなたにもきこえているかしら と

考えるのよ

一緒に買った竹下夢二のちいさな絵を  
覚えてる？

清水の舞台から飛び降りたのを

心配しないで

私は私らしく生きているから

それでも

いつも笑っていてくれた あなたを

私は時折 感じるの

細やかな雪のひとひらに触れていると

そっと雨だれの音色に耳を傾けていると

そして空の青さを見上げています

私は生きています

あなたは傍にいる

いつも

いつまでもいてくれる

私は 生きてゆくわ

## 非日常を超えた日常へ——希望

児童文学のファンタジーは、<sup>レ</sup>行きて帰りし物語<sup>ト</sup>と来たりて戻りし物語<sup>ト</sup>に分けられるのではないかと、と宮川健郎氏は論じた。更に具体的に言うとなれば、「ナルニア国物語」のように、ある世界へ行き、そしてまた日常の世界に戻って来る、帰って来るという論。そしてある世界から来て、また日常から帰ってゆく「き

をプラスの方向にならないだろうか、強く願った時、ファンタジーは立ち現れてくるのだろうか。

災いから転じたい日々があった時、魔法は降りて来る。

メディアに流される世の中の次から次への事件。このことが日常とされつつある現在、非日常の初詣にまで、ニセ札事件が起き、汚された気がする。

日常は波乱を含みながら刻々と過ぎてゆく。

しかし、私は、やはり降った雪の白さに見入り、現実の状態を踏まえながら、白さだけではない豪雪という重い真実の向こうに、非日常ではない日常の希望を持ちたいと願うのだ。

## 食べるよるべい

小さい頃、兎を飼っていた。真っ白でフワフワの毛をした赤い目の。

祖父は葛の葉を山からとってきて食べて食べさせていた。私もクローバーをやったりした。

あたたかな、やさしい生き物。

我家の小さな私に対する情操教育のひとつだったのだろう。

き耳ずきん」の論である。このファンタジー論は、あくまでも日常とは別の他の国からの他者がいる。

そして、私たちは、この日常でない非日常の世界で冒険をし、課題を乗り越え、心琢磨し、本を閉じた。そうして私たちは、ひとつの物語世界で、主人公と共に成長してきたのだった。

ファンタジーとは「あったようなこと、ありえたようなことをあったように書かれたもの」だと、佐藤さとの氏は云う。

旧約聖書は、あったことをあったとして書かれたものだが、この場合はどうだろう。奇跡というファンタジーが随所にある。

すると、これは確かにあったファンタジーということになる。

日常と非日常の差は無く、むしろ全てが非日常だともいえる。

このボーダレス状態は現実を否応にもみせる。

世界のあちこちで争いが起き、天災による被害が私たちの心を苦しめる。人々を傷つける。

私たちは祈る。逃れたいと思う。あるいはボランティアをしたいと志願する。

ここで思うのだが、この思考や立場のマイナス状態

或る日、その兎はケージの中で冷たくなっていた。

私はじっとみつめた。動かなくなった、固くなった生き物を。

祖父と父は何か話をしていた。

そして、その日の夕方、父は新聞紙にくるんだものを勤め先の学校から持ち帰って来た。

「兎の肉だ。」

父は死んだ兎を勤務先の先輩からさばいてもらい、食べられるようにして持ってきたのだ。

戦時中、大井沢など山で過ごした父にとって、また祖父にとって、それはごちそうだったのだろう。

たちまちのうち、肉は料理され、兎汁ができた。

私たち家族は食卓につき、箸を持った。

「いただきます。」

私はドキドキと心臓の動悸が速くなるのが分かった。

この汁の肉は、あの飼ってかわいがって育てていた兎なのだ。

私は苦しんだ。葛藤した。食べていた牛肉や豚肉、そして鶏肉、魚たちと同じようにして私が食べるようになった、

私はお椀を持って必死になって祈った。

（ありがとうね、お前。私はお前の命を決して無駄にしないで、きちんとした人間になるから許してね。ごめんね。ありがとう。）

そうして、汁をすすり、肉を食べた。  
初めて食べた兎の肉は独特の味がした。  
けれど、それを美味しくないだの、とは、決して言っ  
てはいけない、と思った。  
生きていくことは食べていくことだ。  
可愛いそうだから食べない、と、いうのは自分に与  
えられたものとして来た命に対して省って失礼だ。  
必ず、御返しをさせていただきます―。  
私は、その兎汁を食べた時、様々な事を思った。  
私は祖父と父を恨んだりしなかった。  
「もったいない。」と思ったのだろう。  
過酷な戦時中の山の中で、肉はとても貴重だったと  
聞いていた。  
私は「いただきます」の意味を少し知った。

## うそつきニャンコ

◎ 大武芳子

### 《その一》

おれはみんなに「うそつきニャンコ、すてねこ」って言われるけれど、おれは悪いうそな  
んかついていないよ。

おれは西藏王に住んでいる目の黄色いトラねこだよ。しっぽは短いけれど、茶色と白のし  
まがすてきなんだ。

この前、まだ「ホーホケキョ」って鳴けないうぐいすの子どもにあった。そしたら、うぐい  
すの子どもはおれに聞いたんだ。

「あんたは、ネ、ネッコ?」

「ちがうよ、おれはトラねこだよ」

「えっ!」

「ネ、ネッコでなく、トラねこだ!」

「そうなの!?トラの子どもなんだ」

うぐいすの子どもはまだ小さいから、おれのことをトラの子どもだと信じてしまったんだ。  
「トラの子どもって、すてきね」  
うっとりとおれを見るんだ。  
ずうっと一人ぼっちのおれは、生まれて初めて「すてきね」って言われたものだから、もうその気になっちゃったんだ。もちろん、ニャーオーなんて鳴けなくなってる………  
うぐいすの子どもは巢に帰って、かあちゃんにじまんげに言ったんだ。

「わたし、トラの子ども見たー!!」  
「え、トラの子?」

「そ。茶色と白が美しいの。山小屋に住んでいるの」

「ああ、あのうそつきニャンコね。本気にしちゃいけませんよ」

「でも、すてきだったのに………」

「あれは、坊やを食べてしまうかもしれないから、友だちになんてなるんじゃないよ  
んよ」

そんなわけで、うぐいすの子どもは遊びにこなくなったんだ。おれは、また一人ぼっちさ。  
遠くの林で「ホホ、ホケツキヨ」って鳴いているのは、あのうぐいすの子どもなんだね………  
………おれには「ホホ、ホケツキヨ、こっちにおいで」って聞こえてしょうがないんだ。

## 《その二》

その日は、ほんとうに青い空だった。

竜山にはまだ雪が残っているけれども、あたたかかった。

おれはほんやり、畑に咲いている黄色な花を眺めてた。

その時だ。

バサバサと大きな音がして、目の前のくるみの木の枝に鳥が一匹、とび降りてきた。たかのような羽音だった。おれはちじみ上がった。  
たかはきらいなんだ。

でも、その鳥はへんときりんな声で鳴いたのさ。

「グアツ、グアツ、グアツ」

黒光りする大きなカラスだったんだ。

「グアグア、グアツ、グアツ」

恐ろしげに鳴いているけれど、なぜかやさしい目だった。

「お、おまえさんはカラス?」

へんときりんな鳴き声のカラスはええばって、でも声を少し低くして言った。

「おれさまは、たがだ」

「たが?」

「たがでない。たかだ。黒いたかだって、この山にはいるんだ」

「……………」

おれはそれ以上、言うては悪いと思った。どう見てもカラスなのに。たかになりたがっていると思っただからだ。おれだって、目がみどりやしっぽの長いシヤムねになりたいと思っているからね。

そのつぎの日から、毎日へんときりんなカラスはやってきて

「グアツ、グアツ、グアツ」

と鳴いて、おれに「たか」だと言いつづけた。

食事を持ってきてくれた山小屋の持ち主のツトムさんは、その声を聞いて

「かわいそうに。母ちゃん、カラスじゃなかったんだなあ……………」

おれは思わずさげんだ。

「カラスでないよ！あいつの心はたかなんだ」  
でも、ツトムさんはおれの言っていることがわからない。鳴いているおれを抱き上げて  
「おまえも母ちゃんの顔を知らないからなあ」  
そう言っただけ、やさしく、やさしく頭をなでてくれたんだ。  
いつのまにか、ツトムさんのひざの上で、おれはねむってしまった。  
目が覚めた時は、カラスはいなかった。でも焼（も）えていっているような夕やけの空上（たか）  
く、二羽の鳥が消えていくのを見たんだ。  
ツトムさんも帰っていった。  
おれはあいつが明日、遊びにきたら言っただけやるんだ。  
「オッス、たかくん……………」  
ってね。

## みかづきさまの子守唄

わたしは不思議な家にすんでいます。  
屋根に正方形の大きなまどが六こもついているのです。  
天気の良い日は、六このまどは水色にそまります。そして、広い雲がゆっくり、ゆっくり  
通り過ぎて行きます。

「どこに行くの」  
わたしが話しかけても雲たちはすまし顔でだまって通り過ぎて行ってしまいます。  
夜になると、ベッドの上のまどを見ます。真っ黒な色でそまります。ママは目をつぶって、  
「羊の数をかぞえなさい」と言います。でも、ねむくないわたしは、目をあけたまま数をか  
ぞえ続けます。  
「一ぴきの羊……………二ひきの羊……………三ひきの羊……………」  
五十までかぞえても、ねむくならないのです。目をつぶって「五十一ぴきの羊……………五十二  
ひきの羊……………」  
なんと羊ではなくて、キリンがでてきて、ライオンがでてきて、思わず目をあけてしま  
いました。  
「ヤダー」  
大きな声を出してしまいました。  
そしたら、下の部屋から、ママに「まだねていないのね」と、言われてしまいました。  
しかたがないので、また目をつむって、  
「五十二ぴきの羊……………五十四ひきの羊……………」と、かぞえていきました。九十九ひきの羊…  
…と、言った時です。真っ黒な窓に銀色のスベリ台のようなみかづきさまが、のぞきました。  
「おじょうちゃん、まだねむれないのね」  
みかづきさまは鈴をふったような、やさしい声で話しかけてきました。  
「そうなの……………困っているの……………」  
「じゃ、わたしがゆりかごになってあげましょうね」  
みかづきさまは、すうーと窓から入ってきました。  
窓の外で光っていたみかづきさまは、とても冷たそうで、ハサミのように切れそうでした  
のに、わたしをだきあげたみかづきさまの手は、ほっとあたたかく、黄色のひよこのように、  
ふわふわしていました。

みかづきさまは、小さな声で歌いはじめました。

「ゆら、ゆら、ゆらら、夢の国に出かけましょう」

「夢の国ってどこにあるの」

「おじょうちゃん、夢の国にもうついているのよ」

わたしがおどろいていると、みかづきさまは、空いちめん光っている星たちにやさしい声でいいました。

「星たちよ、じゅんぴはいい？」

星たちが、ゆっくり、ゆっくり集まって、一匹きの羊になり、さらに集まって二匹きの羊になり……三匹きの羊になり……五十匹きの羊になり、ゆっくり、ゆっくり歩いていきま

した。五十一匹き……やっぱり羊ではなく、キリンでした。星たちは、少しあわてて集まって、長い首をつくりました。そして、五十二匹きめは、ライオンでした。ひとつの目だけが赤く光っているようにみえました。

わたしはおもわず、

「ヤダー」

と、言っていました。

ライオンは立ち止まって、わたしのほうを向いて言いました。

「おじょうちゃん、ありがとう、おれのことを心で呼んでくれたんだね」

「ええ？」

「おれは嫌われものだから、思ってもらえないんだ」

「わたし、ライオン大好きよ」

「ありがとう、お礼にまほうのお花をあげるよ」

と言って、一本の花をおいて、ゆっくり空の向こうに歩いて、消えてしまいました。

みかづきさまが、手をのばして、その花をひろいあげました。

「あら、小さな、小さな星が集まっているお花ね」

わたしは、きらきら光っているその花をもって、いなくなったライオンに「ありがとう」と、さげびながら、ふりました。金色の花ふとんがとびちりました。花ふとんも星のかたちをしていました。

みかづきさまは、「ゆらゆら、ゆらら」また歌いながら、わたしをゆすってくれました。

「おじょうちゃん、おやすみ」

と、みかづきさまが言って、わたしをやさしくふとんにおろしてから、となりのおにいちゃん

の窓に、うつつていきました。

おしまい

# 青い稲穂

◎ 佐藤藤三郎

常造さんは私より一回り近く年上の人だが、私に「君の好きな女は誰だ」としつつこく何度も聞くのだった。高校をおえたばかりの頃だったから自分に関係のない事をどうしてこんな執拗に聞きただそうとするのか、それが私にはどうしてもわからなかった。

その理由（わけ）が分かったのはそれからずっと後のことで、私はすでに四十歳を過ぎ、彼もまた五十も半ばになっていた頃だった。常造さんと大変親しい仲である画家の文夫君が私と一緒にビールを飲みながら、常造さんは英子という女性を好きで好きでたまらなかつたことを話したからである。そしてそのとき、私にはそれが格別な関心があるでもなく、ただ「なるほど、そうであったのか、住む家がすぐ近くであり、親戚の仲でもあるしなあ」とぐらいいしか思わなかつたが、時をおいて考えてみると常造さんもしかして私が英子

の解き方を困らせて嬉しがる、といったやや変人ともいえる頭脳の持ち主だった。

そうだ「学校」といえば、それは私と同じ定時制の高校のことで、常造さんがそれに入学したときの年齢はすでにハタチを過ぎていた。

農業高校に定時制という課程が出たのは戦後の「教育の機会均等」が叫ばれ、青年学校が廃止になって六・三・三四の学校制度ができたときからである。そしてその当初の頃は青年学校の学歴を持つ人にはそれなりにその学歴によって学習の単位が認められ、四年生に編入し一年の履修だけで高校卒の免状を受けられた人もいたし、三年生に編集して二年間学ぶことを希望した人などさまざまあった。しかし常造さんが入学した昭和二十五年頃にはもうそのような人もいなくなり、彼は二十歳を過ぎていたのだが一年生に入学しなどなく、ひたすらに百姓をすることしか考えていないのだから高校卒業の資格や卒業証書が欲しいというのではなくて、ただ勉強したいの一念だけだったからである。いや、それ以上に単なる知識とか教養などといったしゃれたものを求めて学校に入ろうとしたのではなく「青春」という時期の生き方を「学校」というものに求めたのであつたのではないかとも思われる。つまりいかなれば平々凡々と「並」の思考をする

という女性を好いてはしないのか、と勘ぐたものであつたことがわかつた。しかし常造さんは私が英子には全くその思いがないことを知ると、さも安心したらしい様子になって、その後そのことを口にするのがなかつた。だが、常造さんの英子に惚れ込む度合いはただならぬほど強烈なものであつたことを文夫君以外の人の話でも知つた。

というのは英子は私と親しい仲である雄太さんに「オレには一っだけ絶対他人に話せない秘密があると云つていたが、それはいったい何なのだろう」と言つていたことの推測からだ。そしてそれが何であるのかとの推測は、雄太さんよりも私の方に関心が深くあつた。というのは「あるいは？」という格別な思いが私にあつたからである。

英子の母親は若くして病死しており、英子は母に代わつて家庭の生活をきりもりを何年間も続けていた。だからもしかして長塚節の小説「土」に出て来るようなことが、父親との間にありはしないのか、という思いがあつたのである。が、しかし、私のその勘は全く当たつていなかった。

常造さんはまれにみる秀才だった。いや秀才とはどんな人を用うのだと問われれば私には答える術はないが異常な程に頭脳の切れ味がよく、特に理数系が秀でていて、学校では数学の先生に難題を持ちかけてそれ

ような生き方の人生は面白くなくつまらない、といったことのように私には見えた。だから彼は私が何かと意見をすると「それは普通の人のいう常識のことばだ」といい「そんなことでは人生が面白く楽しいものにはならない」といわんばかりにはね返されたことが何度もあった。

ある日のことだ。常造さんは遊んでいる子どもたちを集めて盛んに何かを話していた。そして何の拍子か私もその中に入つていた。この時の話というのはこうだ。

私の住んでいる集落は北東に面したすこぶる急峻な傾斜地である。したがつてその道路もそのように急勾配だ。だから自転車ではとてもこいで登れない。手押しでもやつつとというほどの力がある。しかも常造さんの家はその集落の中でも一番上にある。その急な坂道を自転車飛ばして降りればその惰力で学校の近くの早坂という坂道の上り道をペダルを踏むことなく登り尽くせる。また、帰りの道も、その「早坂」という県道の急な勾配の道を飛ばして下れば「上台」といわれいている自分の家までペダルを踏む必要なく登れる」ときよるきよると目をまわしながら凄いい勢いある声で口から泡を飛ばして語つて聞かせていた。

その真剣な面持ちで語る常造さんの話を、集まつている子どもたちもまた笑うこともなくとても真剣な目

つきで聞いていた。そしてその常造さんと子どもたちの対面する輝く目つきを見ながら私もそれが非現実的なものであるなどとはとても思えず、盛んに語る常造さんの顔を見ていた。そして彼にはいつもそのような「夢」と「希望」があり、私などには全く持ち合わせていないすばらしい才能を持っている人であることを羨ましく思った。またして常造さん自身も、そんな夢でしかないようなことを聞く耳を持っているのは村の中では私ぐらいと、しいていえばあとは子どもたちぐらいなものであることをよく知っていたのである。

常造さんはそうした並の人にはたわいもないと思われる「夢」を持つ人であるから、この山間にある小さな田圃で「日本一の米つくりになる」ということを思い立ったのもその一つだった。

外国からの食糧輸入が少なく日本人のお腹が満たされない昭和三十年代のころは、「米つくり日本一」というものを国でも、否国民みんなが讃え、農家にとっては最高の名誉としていたのであった。そして常識破りの常造さんにしてそれに挑戦したのだ。

私はそばに住んでいながらそのことを知らなかった。それが知人である昭八さんが農業高校の恩師である杉太郎先生にでも聞いたのであろうか、ある秋の日にひよっこりと私を訪ねてきて「常造さんの田圃に案内し

てくれ」というのだ。「何故だ」と私が聞くと「常造さんの稲を見たいのだ」と言う。当人の所に行かないでどうして私の所に来られたのか分からなかったが、「日本一の多収穫の米つくりに挑戦して」いるという稲を是非見たいのだという。それなら私も思い、早速その田圃に案内した。実を言ってみればそれまでその常造さんの田圃のそばを何度も通って見ていたのだが、まさかそれが「日本一の多収穫の米つくり」に挑んでいるものとは思っていなかった。何故なら私はこんな山狭にある田圃で多収穫の日本一になる稲作りはできないもの、と最初から思っていたからである。そしてそれが常造さんが私をして言う「あたりまえ（通常）のもの」の考え方でしかない人」ということなのでもある。

私は昭八さんと一緒に車など通れない細い坂道を常造さんの田圃に登って行った。そしてさすがは昭八さん百姓の専門家らしく、稲の姿をただ目で見るだけでなく手を触れ、株をつかんだり、穂を握ったりしながら丁寧に見ておられる。さらにその稲の葉の濃すぎることや、広すぎることに、さらに軟弱であつて健康さを欠いていることなどを私の顔をみながら言葉少なく呟いていた。

秋あげの結果はまさしく昭八さんの言う通りで、稲は倒れいつまでも穂は青いままでとても日本一には及ばなかった。思えば、常造さんはその春、田圃を耕すトであつたか、コンパスであつたかは語らない。そのいづれかを借りてきて自分の水田の面積を正確に測ってみたかつたらしい。しかし測量の担当の教師はそれをどうしても貸すことを許さなかつたという。そのことから大口論となり、どちらも一歩も譲らず、口論は長々と続いた。常造さんは高校生とはいえず既にハタチを過ぎた大人であるし、身分は教師対生徒といえども大人同士の力較べのようになつた。そしていくら時間が経つても二人の間では解決がつかず、誰が誘導したのか、校長室に入って、校長を入れての話し合いに進展した。

その時の校長S先生もまた人並でない人間であつたから、口角泡を飛ばして喋りまくる常造さんの話を面白く聞いていたのに違いない。その場面がいまだよく目に見える。そしてその大校長は鋭すぎる角を持っていて常造さんの話すことばを聞いていて「少し丸くならないか」と言つたという。そんなことばを出されれば、大抵の人は静かに話し合うことになるのだろうが、常造さんはさらに熱り立ち「三角なものかたやすく丸くなどなれるか」と言つて、今度は校長との議論になつたというのだ。それに対し校長はどんな言葉を返したかを、私には話さなかつたが、時間に限りをつけず夕刻暗くなるまで三人の話は続いたのだという。

ある夜のこと、私はその青年団の集まりに行く途中、部落の坂道を自転車を押しながら登って来る常造さんとバッタリと出会つた。そして歩みを止めほつと息と唾を吐きながら私に話しかけた。「学校でK先生と大喧嘩をしてきた」というのである。喧嘩の理由は測量機器のことであるとのこと。彼は、測量器とだけ言つていたので、平板測量のものであつたか、トランシッ

それでもまだ、常造さんは私と会つたその時には胸

の鼓動は収まっていなかった。そして問題の測量器のことはどうなったか、それも私にはわからないままである。そのことが切っかけであつたかどうかは分からないが、その後常造さんは学校に行かなくなった。あと四ヶ月かそのぐらいで卒業になるといふときである。学習の単位は未履修ではあるはずだが、常造さんの最も得意の教科である数学を教えていた先生がクラスの担任でもないのに校長との仲に入り、話し合いをしてくれたらしく、その結果、校長も常造さんの年がいもなく学究への志や、生きる粘り、身を引寄せせるものがあつたらしく「授業料を納めれば」となった。それで杉太郎先生は常造さんにそのことを告げ「君の今には卒業証書など必要ないと思うが、それがけつして邪魔になるものではない、だから貰つておけ」といくら説得しても頑として聞かない、と杉太郎先生は私に話したことがある。そして杉太郎先生はいつかきつと時が経てば常造さんも意地がとけることがあるだろうと未納の分の授業料を事務に納め、卒業証書を預かつていると言われていた。

しかし、その後、常造さんは杉太郎先生のそうした気持と心を受け入れたかどうか、どちらからも聞かなかった。そして今は兩人其他界されているので卒業証書の所在が分からない。あの頃と比べて私や常造さんの青春の頃と今の若い人たちとの違いの善し悪しを論

ずる気はないが、しかしあの頃も今も「自分の生きる将来」について悶々としている人たちがいっぱいいることは確かである。しかし言えることは、常造さんの青春の頃は「家」というもの、あるいは「家族」の暮らしの貧しさに「青春」というものがガンジガラメに縛りつけられていたことは確かである。そしてその束縛を立ち切る勇気がないまま時が過ぎ、老いに至ったことが悔やまれる。

常造さんと私は一回り近く年齢の差があり、性格も全く違うようであつたのだが、なぜか彼はよく私と話すことが多かった。それが道端であつたり、夜の囲炉裏端であつたりさまざまだが、ある時、黒森山の炭焼小屋に常造さんがひよっこり入ってきた。彼も近くの山で炭焼をしていたのである。その時私も父親とは別に一つの炭窯を持ち、炭焼をやっていたので、そこにひよっこり顔を出し「この本すごく面白い、読め」と言つて貸してくれたのが石川達三の『風にそよぐ葦』という本だつた。常造さんが「とっても面白い」と言つた理由はよく覚えていないが、たぶん戦後の変化激しい社会の中で自分というものを自分でつかみきれず、あれよ、これよとふらふらして迷つていて、何もつかみきれずにいる青年のことを面白く描いている、と言つていたようだつた。つまり、それが自分であり、きつと「お前もそうであるに違いない」というのが薦めに

来た理由だつたのであろう。

私はその小説を炭窯の鉢の上に寝そべつて読んだ。その小説はやわらかい都会に住む人の青春を描いたものだつたはずだからけつして炭小屋で炭焼男たちが読むにはふさわしいものとは思わなかつたが、しかし常造さんはすごく理知的で弓の矢のように曲がりを好まない人間でありながら、一方には石川達三の小説、さらにはいへば常造さんや私などとは別の世界の人たちを描いているものに大いなる感動をしたのである。つまりどんな強そうな人間であつても弱さや情があるものだ、と彼の生きざまを見つづつくと思わせられる。そして自分のどこの部分を表に強く出すか、出せるかはけつして遺伝的なものだけでなく、生まれたその時からの育つ環境に大きく左右されるものであることを私は常造さんに教えられた。

常造さんが結婚したのは何歳の頃だつたらうか。私はその妻となつた女性を見たこともなかつたが、絵を描く文夫さんはハケゴにスケッチブックを入れて背負い、ときおり山形市郊外の成安から自転車であつて来ていた。文夫さんは私よりもつと若く独り身だつたから常造さんの家に来て二人で酒を呑み、泊まることもしばしばあつた。そんな夜には文夫さんが常連さんに新妻と「キスしてみせろ」といへばそれをやってみせるほど夫婦の仲の良さをみせる、と文夫さんは嬉

しそうに私に教えてくれたこともあつた。

そんな夫婦であつたが、村の雑木林が裸になると村での炭焼ができなくなり、福島県境に近い板谷まで仲間三人で炭焼に出かけて行つた。その寝泊まりは炭焼小屋である。

ところで、その炭焼小屋の生活がどんなものであつたか私にはわからないが、ある日、妻の髪の毛をひつかまえて振り回したとかで、妻は逃げ去つたということを知った。学校で教師や校長といつた強者につつかかるのには私も感心するが、しかし弱者である女性をそのようにまでする、といつた気の短さ、それには並の人から見ればあまりにも異常すぎる。あれだけの秀でた頭脳の持ち主が、何故にそのようなことをするのか、と情けなく思うのは私だけではないであらう。

エネルギー源が石油の時代に変えると常造さんは養鶏を始めた。その頃はまだ軽トラック、ましてや四輪駆動の車などない時代だつたから、購入するエサも自動車が入れないところの道を自分の家まで人の背中で運ぶしかない。その登り坂の細い道を額に汗して運んでいる姿がいまだに私の脳裏にはつきり映り残っている。もちろんその頃は人糞尿も「下肥」といい、貴重な扱いをされ、肥樋といわれる「ど樽」を背に負い、又は天秤棒で担いで畑に運んでいたのだから、鶏のエ

サを人の背にすることなどはそれほど人に嫌われることではなかったが、しかしそれは誠に不能率な技であって、この競争社会ではとても追いつけるものではない。したがって常造さんは自宅の屋敷での養鶏に見切りをつけて村を下った。そしてその判断こそは彼の気の短さが生かされたのである。

というのは、その時期にはまだこの国では「米」の余りがなかったので、日本一の多収穫をめざした山中の田圃も、養蚕で活路を展こうとして植えた桑の畑にも買い手がついて、いい値で売ることが出来たからである。そして上山市の郊外の平地に土地を求め、鶏舎を建て、まずはそれなりの養鶏の経営ができ、まずまずの暮らしが出来て、再婚し、二人の子どもを産み育てた。

しかし経済の変化はとどまらなかった。「漁業が海からあがった」と言われるように海産物の業者が養鶏を始めたのである。その規模は何百羽などといったものではなくて何万羽だ。そして卵価が著しく下落した。

私が子どもの頃は病気のときでもなければ卵を食べさせてもらえなかったし、しかもそのようなときであつてすら一個の卵を汁椀に割って、醤油を卵の量以上に加えてかきまわし、そのしょっぱい卵を三人も四人も、茶碗に盛ったご飯にわけてかけて食べる、といった貴重なものだった。

ある時、そのような貴重な卵を出荷する箱詰のまま常造さんは我家に持参して来た。そして語る話は養鶏の経営がすっかり軌道に乗っている、と元氣いっぱい、自信に満ちた語りぶりだった。それが我家にだけではなく一軒離れた家にも「こちらのオヤジと俺は血筋のつながりがある」などといって、一箱といえれば卵がいくつ入っているのかわからないが持ってきてくれた、とのことだった。

私はその時それに何かお返しをしたか覚えていない。いささかなものをやったとは思いますが、おそらくその鶏卵一箱に値するほどのものは返していなかったような気がする。というのも常造さんが元氣に語る景氣の良さを信じたからである。

しかし後になって考えてみればその裏は話とは全く逆で、卵価が下がり、小規模な養鶏農家は市場に出荷しても採算のとれるような状況ではなかったのである。つまり経営の内容は逼迫していて、知人友人などに買い求めて欲しかったのだ。それを正直に言わずに、逆に言う。それが常造さんの長所ともいえるが欠点でもあったのだ。

それから間もなくして常造さんは養鶏もやめ、その土地や家も手放したことが聞こえてきた。そしてその後の居所もわからない、ということの情報が伝えられて来た。さらに、ライブドアといったもののようなも

のにはとてもおぼつかないだろうが、そのような不安定な先物取引みたいな金融に手を出したらしきことの情報も聞こえて来た。その確かなことを知る由はないが、けっしてそれが上手く行っている、ということではなかった。

そのどん底に落ち込んだ時の痛みや苦しみを他人に話せるようなものではなかった。そしてまた律儀な常造さんは親戚または知人友人といったたぐいの人に迷惑をかける、ということを全くしなかった。いうなれば保証人となってその人の財を滅ぼした、というようなことは全然聞いていない。そうした異常なほどに律儀さもまた知性以上に強かったのである。

そのような苦難なときでも、誰よりも心親しい画描きの英夫さんにも顔をみせなかったし、もちろん私にも顔を見せなかった。それからしばらくして、常造さんはこの世の人ではなくなったことが、人伝えに耳に入った。

# 前略 沢尻エリカ様

◎ 高橋英司

前略。エリカ様。七月某日、三十七度を超すかと思われる猛暑の中、フォーラム山形へ出掛け、話題の映画『ヘルタースケルター』（蜷川実花監督）を観てきました。予告編やヤフーのサイトなどで多少の情報は得ておりましたが、映画は想像以上に、主人公・りりこ様の世界というより、まさにエリカ様の世界という印象でした。キラキラした夢のような世界、地方の田園風景的環境から見れば、架空の世界のような美的イメージに圧倒されました。とはいっても、私は、沢尻エリカ様の実像を知らず、マスコミ等の報道を鵜呑みにして、エリカ様の世界を勝手な思い込みとして抱いているだけですので、その点はご容赦ください。

一般市民は、女優に限らず芸能人やプロスポーツ選手については、その仕事ぶりやゴシップによってしか情報が得られないわけですので、虚像にしか手が届か

ないのは仕方のないことです。しかし、その虚像の中に、一般市民の欲望が示現されているのだとすると、己の潜在意識の奥底を覗き見ないわけにはいきません。もちろん、この映画の中のみならず、宇宙人との関係と同じくらいに無縁だと思ふ人もいれば、遙かに遠い存在であつても、微かな一本の糸くらいの繋がりがあつてと思ふ人もいるだろうと思ふます。シンパシーの程度のことですが、完全に拒絶する人がいても不思議ではありません。

エリカ様。あなたは、世間の良識的な保守層の市民からは大変な悪評価を得ているのではないかと思われまふ。幾分か本性が顕れていたのかもしれないが、例の舞台挨拶での「特にない」「別に：」発言等が高慢な振る舞いだつたとバッシングされて、「エリカ様」とか「女王様」などと呼ばれているのも、ふと実像を垣間見せ、虚像の綻びを曝け出したというより、奔放な振る舞い自体が、虚像以外の何ものでもないことを表象しているのだと、私には思われました。ユーチューブで、例の発言場面を改めて見てみると、教師から指名された生徒が、解りません、と答え、質問はと問われ、ありません、と応える場面にそっくりです。傲慢、高飛車というより、この女優は頭の中が空っぽなのじゃないかという印象を与えます。一般市民は、虚像に対して悪印象を抱いているのです。家族でも友人でもな

い一般市民は、実像からは遮断されています。私も今、エリカ様と呼びかけましたが、これは冷やかしが半分です。からかい、冗談です。しかし、ほかの半分は、エリカという名前と容貌から無意識的に喚起される何かを感じ、エリカ様と呼びたくなるようなオーラがあなたにあるからなのだと感じました。

その点を見抜いて、『ヘルタースケルター』のりりこ役には、沢尻エリカしかあり得ないと起用した蜷川実花監督は、さすがに写真家ゆえの審美眼の持ち主だと思ひました。映画はその虚像の極点のような世界を、見事に表現していました。マスコミの過剰な宣伝もあつたでしょうが、平日とはいえ、それなりの観客が入つていたことをみれば、興行としても大成功だつたと思ひます。

虚像であるエリカ様が、映画の中でも虚像であるりりこを演じたわけですから、りりこは、全身美容整形手術によってトップモデルとなった存在です。その手術の後遺症やストレスから精神不安定になり、後に、デブでブスだった過去が暴露されて没落していくという展開、いや、ラストは、その負の過去をもひっくり返して勝ち組となる栄枯盛衰のストーリー。これはまさに世間からバッシングされて落ち目になるかと思ひきや、一転、見事に立ち上がるエリカ様にそっくりです。

マスコミと世間が悪口を言い立てていた二〇〇七年、

私は、それほど取り沙汰される理由がわからず、いったいどんな女優なのかと気になって、初めて何本かの映画作品を観ました。『問題のない私たち』（森岡利行監督・二〇〇四年）、『パッチギ』（井筒和幸監督・二〇〇五年）、『間宮兄弟』（森田芳光監督・二〇〇六年）、『手紙』（生野慈朗監督・二〇〇六年）の四本です。監督が一流であつたせいかもしれませんが、すべて面白く優れた作品だつたと思ひます。ほかにも話題になつた『クロウズド・ノート』（行定勲監督・二〇〇七年）などがありますが、まだ観る機会がありません。おそらくあなたの魅力を引き出したよい作品だろうと思ひます。たつた四本しか観ませんでした、あなたの魅力はじゅうぶん理解したつもりです。

あなたは、可愛い、人形のような顔立ちです。好き嫌いをさておいて、あなたの身体を目にして、美が存在することを否定することはできません。映画監督なら、一度は使つてみたい女優だと思ふことも頷けます。また、悪評判の割には、存在感と演技力が光つています。天性の才が具わつているのだと感じます。その証拠に、『パッチギ』では、日本アカデミー賞、キネマ旬報はじめその年のあらゆる新人賞を総なめにしました。見られるべくして生まれてきた存在だと思ひます。

個性がないと言えば個性のない端正な顔、スタイルの良さ、脚の長さ、『ヘルタースケルター』の冒頭で露

出した乳房。まだ二十六歳の若さですから当然ですが、やや外向きの乳首、垂れずにびんと張りつめた形の良いいオッパイは、男の助平心に挑戦するような力強ささえ持っています。

あなたは、一九八六年（昭和六一）四月に、日本人の父とアルジェリア系フランス人（アルジェリア生れフランス育ちのベルベル人）のハーフとして、三人兄妹の末っ子として生まれました。父と次兄は亡くなりましたが、家族は非常に仲良く、映画の撮影後には頻りに家族旅行をしているとウイキペディアに出ています。馬主だった父親の影響で、乗馬が得意だとも知りました。

二〇〇八年（平成二〇）、あなたは、マルチクリエーターと称するライター・元映像作家の高城剛氏と結婚しましたが、三年足らずで破綻。現在は別居中のようですが、あなたのような虚像としてのアイドルである限り、通俗の極みであるような現実的な結婚は、土台、無理なことだったと思います。これはあなたを非難して言っているわけではありません。あなたに限りませんが、結婚などすべきでない人が何らかの幻想を抱いて結婚するから、結果、離婚という結末を迎えるのだと考えるからです。でも、あなたが結婚前、高城剛氏とトルコへ皆既日食を見に行ったというエピソードは、ロマンティックな良き思い出だと思います。あなたは、

これからもっともっと人として、一人の女性として成長しなければなりません。

昨年、消息不明だった元日活の曾根中生監督が、新聞のインタビューを受けて、今度メガホンを取る機会があったら沢尻エリカと答えた記事が載っておりました。映画界を去った老監督をも惹きつける力を、あなたは持っているのだと改めて感じました。私がかつて、職場で、『パッチギ』を観た感想として、沢尻エリカって意外にいいねえ、と言ったら、どこが、何が、と一斉に白い眼を向けられたことを思い出しました。

ともかく、あなたは事務所に迷惑をかけるような振る舞いが原因で、二〇〇九年、「スターダストプロモーション」という事務所から契約解除となり、芸能活動を休止せざるを得なくなりました。そして翌年、個人事務所「エル・エクストラテレストレ」（宇宙人という意味のスペイン語）を設立し、マスコミ側に対して、次のような誓約書にサインしなければ、今後の芸能活動について発表する公式サイト内のプレス専用ページを閲覧させない方針を明らかにしました。

#### 6カ条の要約

- 1 情報や声明は正確に伝える。わい曲や誤解を招くことを避ける
- 2 情報を公開する前にその信憑性を十分確認し、根

拠のない噂話は公開しない

- 3 一方的か屈辱的な表現や侮蔑表現を使わず、名誉棄損するようなコメントはしない
- 4 私生活やプライベートにかかわる情報は許可なく公開しない
- 5 不正確、有害な情報を公開したら訂正する
- 6 私生活などを撮影した映像、画像は許可なく公開しない

この六カ条は、読んでみて特に変わった内容ではありません。なぜ、こんな内容の誓約書を必要とするのか、疑問さえ抱きます。週刊誌等の芸能マスコミが、六カ条に反する報道をすることで、商売を成り立たせていたのだという憶測すら生じてきます。即ち、不正確でわい曲された情報、根拠のない噂、名誉棄損、プライベートの暴露によって、面白おかしく読者に媚びを売る。週刊誌や芸能ニュースはそんなもんだという認識はありますが、報道される側にとっては堪ったものではありません。芸能人や政治家などの公人にはプライベートはないのだという考え方もあるかもしれませんが、いい加減、でたらめ、捏造は許されるものではないと思います。あなたの事務所の声明は正當なものだと思えます。

しかし、私は、幾分かはマスコミ側にも肩入れした

くなります。あなたは、工場で油にまみれて働く労働者や土をこねくり回す農民ではありません。夢を創造し、一般市民の満たされない欲望の穴埋めをする存在です。単なる芸能労働者と見做すわけにはいかないのです。誰かと誰かの不倫報道があれば、一般市民はそこで不倫の夢を見るのです。そうでなければ、二股交際が発覚した某芸能人が、当事者である女性に悪かったと謝罪するのならわかりますが、世間に迷惑をかけたなどと謝罪するのは馬鹿げたことではないですか。内容の善悪を問わず、一般市民は幻想の中で欲望を満たすのです。

エリカ様。あなたは特別な存在だという自覚を持つた方がよいと思います。人権意識も大事ですが、本音を出したくなることもあるでしょうが、「別に：」と言ったり、沈黙したりすることは好ましいことではないと思います。粗野な態度を取ったら、その辺のバカギャルと同じになってしまいます。『ヘルタースケルター』のメイキング映像を見たのですが、「明日もよろしくお願ひします」とスタッフ一同にきちんと挨拶していました。あなたは、ヤンキーなギャルなどではないと私は感じました。役柄に集中している熱意がひしと感じられました。それが女優です。

そこで、今回の『ヘルタースケルター』は、あなたが現在位置している境遇を逆手に取った見事な企画だっ

たと思つたわけです。工員や農民の青年にとつては、夜空の星よりも遠いような、幻のような人間世界がスクリーン上に展開され、見終わった時に、ふーっと息をつくしかない世界です。

中途半端な手紙になりましたが、今日『ヘルターズケルター』を観て来て、急に何か書かずにはいられない気持ちになりました。それがあなたの持つ魅力です。通り一遍の美人女優とは異なるものがあるのです。こんなふうに、自分の娘よりも年下のあなたに言葉をやすのは面映ゆい気もしましたが、一筆啓上したい衝動に駆られました。ではこのへんで。

## 「薩摩藩邸焼き討ち事件」考

（戊辰戦争へ、赤報隊と上山藩等の動向）

◎岩井 哲

「王政復古の大号令」という名の軍事クーデターは、実は失敗に終わっている。山内容堂や松平春嶽らいわゆる緒侯会議派の巻き返しに合い、徳川慶喜への辞官納地は実質的に空無化し、討幕派は先の展望を失っていたのだ。そのため大久保利通と西郷隆盛らは新たな討幕の策を考え出さなければならぬ状況に追い込まれていたのである。

そこで打ち出した策が江戸市中を混乱に陥れ、旧幕府側を挑発し、武力討幕への戦端を開く口実をつくり出すことであった。

西郷隆盛は岩倉具視の了承を得るとまず相楽総三（本名・小島四郎左衛門）等の浪士に赤報隊を組織させる。相良総三は、下総相馬郡（現茨城県取手市）の郷士小島兵馬の四男として江戸赤坂に生まれ、関東方面の各義勇軍に参加した浪士で、元治元年（一八六四）には天

狗党の乱にも参戦している尊皇攘夷派の人物である。

赤報隊の組織概要については、一番隊、二番隊、三番隊からなる組織で、中軸とも言うべき一番隊は、相楽総三を隊長に、以前の相楽の同志たちが中心となっている部隊である。二番隊は鈴木三樹三郎が隊長、新選組を分派した伊東甲子太郎によって組織された御陵衛士がその母体。資料によると隊長の鈴木三樹三郎は伊東甲子太郎の弟にあたる。そして三番隊は、近江の水口藩藩士が中心となった部隊で、隊長は油川鍊三郎であった。ちなみに隊の名前は「赤心を持って国恩に報いる」から付けられたと伝えられている。

ところで、公家の綾小路俊実、滋野井公寿を盟主に擁立、相楽総三を隊長として赤報隊が正式に組織されたのは慶応四年（一八六八）になってからのようである。だが、西郷は意図的にかそれを待たずして、慶応三年（一八六七）十一月以降、江戸市中攪乱をはじめ数々の蛮行を、浪士集団、実質的には赤報隊といってよい組織に命じていたのである。

旗本・御家人を中心とする旧幕臣を徹底的に挑発することが任務の中心であった。挑発と言えばまだどことなく聞こえはいいが、その挑発の内容たるや、放火・略奪・強姦・強殺といった目を覆いたくなるような愚挙に他ならなかった。倫理観の強かった江戸社会に於いては、最も罪の重かった蛮行を意図的に繰り返し、社会

不安を醸成し、煽ることに躍起になっていたのである。

この頃、徳川慶喜をはじめとする旧幕府の幹部たちは、小御所会議の動向に対応するため大坂城に詰めており、江戸は市中取締の藩兵のみがその警護にあたり、江州は市中取締の藩兵のみがその警護にあたり、幕を企てる薩摩・長州側にとつて、交戦するための大義名分を作り出す千載一遇の好機の到来でもあったわけである。

根拠地であった三田の薩摩藩邸には、倒幕を志す尊皇攘夷派の浪士たちが全国から多数招き入れられていた。その中には、あまり知られていないが久保田藩（通称秋田藩、以後表記を秋田藩とする）の高瀬権平等の名もあつた。高瀬は国学者平田篤胤の思想的な流れを汲む思想塾「氣息舎」のリーダー的存在で、過激な攘夷派の行動に批判的だった当時の秋田藩江戸詰家老大繩織衛を慶応三年（一八六七）十二月十九日の夜に暗殺し（『秋田戊辰勤王史談』宙外後藤寅之助編／五十二頁）、その後薩摩藩邸に身を寄せていた人物として伝えられているばかりではなく、慶応四年（一八六八）七月、秋田藩が突如奥羽越列藩同盟から離脱する際の藩論形成に影響を及ぼした人物の一人とも言われている。離脱を決定づけた事件、仙台藩使者十一人の、秋田藩砲術所の志士たちによる殺害（鎮撫総督府下参謀大山格之助の謀略説もある）も、高瀬の影響の下に引き起こ

された事件とみてほぼ間違いあるまい。

ここでは、たまたま秋田藩の例をとつて書いたが、様々な経緯で各地から薩摩藩邸に集まった浪士たちは、総勢五百人とも言われている。浪士たちは薩摩藩士伊牟田尚平や益満休之助に指導を受け、煽動されていく。その浪士たちに向けて作成された任務遂行のための指針「御定書」をみると、攻撃目標は次のようなものであつた。

- 一、幕府を助ける商人と諸藩の浪人
- 一、志士の活動の妨げになる商人と幕府役人
- 一、唐物を扱う商人
- 一、金蔵をもつ富商

この浪士たちを指導していた伊牟田尚平と益満休之助の二人も、実は慶応三年（一八六七）十二月二十三日、江戸城二の丸に放火するなどの破壊工作を自ら行なっている過激な人物であつた。江戸城二の丸といえば、当時天璋院（篤姫）と静寛院宮（和宮）が御付きの女中たちと生活していた部屋のあるところで、本丸の東側に位置していた。

これらの挑発行為に対し、旧幕府側も黙認しているわけにはいかず、前橋藩、佐倉藩、壬生藩、庄内藩に「盗賊その他、怪しき風体の者を見掛け次第、必ず召し捕り申すべし。賊が逆らいて、その手に余れば討ち果たすも苦しからず」と厳重に市中の取締りを命じてい

る。だが、武装集団に対してはなかなか有効かつ十分な取締りとはならなかつたようである。庄内藩は、江戸市中の治安維持の任にあつたため、その中心部隊として、藩が預かつていた新徴組を薩摩藩邸の見張り役として配備していた。

ではここで、十二月二十五日に至るまでの主な騒乱行為をあげてみる。

まず慶応三年（一八六七）十一月末の竹内啓（武蔵入間郡竹内村の名主・現在の埼玉県）を首魁とする十数名のグループが下野出流山満願寺の千手院に拠つて檄文を發し、百五十名を越える一団となつて行軍を開始。同年十二月十一日には旧幕府方の藩兵と交戦し、鎮圧される事件が起こっている。敗れた竹内側は数名が脱走し、逃げ込んだ先がほかでもない薩摩藩邸であつた。また同年の十二月十五日には相模の荻野山中藩（現在の神奈川県厚木市中荻野）の大久保教義の陣が襲撃され、撃退された襲撃者が逃げ込んだ先もやはり薩摩藩邸であつた。十二月二十日の夜には鉄砲や槍で武装した五十名が御用盗のため同藩邸の裏門から外に出たところ、かねてより見張っていた新徴組に追撃され、賊徒は散り散りとなって再び薩摩藩邸へと逃れた。これら旧幕府側の対抗に対して浪士側（薩長）も反撃に及び、十二月二十二日の深夜、新徴組が屯所としていた赤羽根橋の美濃屋に三十人あまりの賊徒が鉄砲を撃ち込んで逃走、

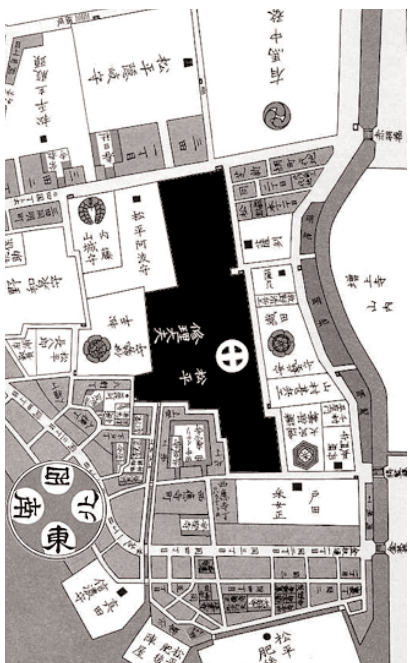
薩摩藩邸に逃げ込んだ。翌十二月二十三日には庄内藩の屯所である春日神社前の屯所へも鉄砲が撃ち込まれ、使用人一名が死亡する事件も起こっている。発砲された弾丸は二十数発とも伝えられている。

紹介した騒乱は、集団でなされたほんの一部だが、他に盗み、放火、強姦も江戸市中において日常的であつた。関東一帯を廻つて一揆を煽動、一方では江戸市中の富商を襲つて御用金を徴収することが重要な任務であつたと考えられる。指揮をふるつていたのは確かに相楽総三だが、真犯人として薩摩藩が裏に控えていると疑つた旧幕臣たちは、將軍の留守を守る淀藩主の老中稲葉正邦（近年の研究では、陸軍奉行と勘定奉行を兼務していた旧幕臣小栗忠順が決断したという説が有力）に武力討伐を決意させ、十二月二十四日、庄内藩江戸邸の留守居役松平権十郎に、「薩摩藩邸に賊徒の引渡しを求めた上で、従わなければ討ち入つて召し捕らえよ」との命を下す。これに対し、松平権十郎は庄内藩単独行動では屯所を襲われた一件に対する私怨私闘の謗りを受けてしまつたため、他藩との共同で役に当たらせるようお願いし、上山藩、鯖江藩、岩槻藩の三藩と、庄内藩の支藩である出羽松山藩が参加することになったわけである。戦闘作戦全体の総指揮は庄内藩監軍の石原倉右衛門が、上山藩軍の指揮は金子与三郎が執っている。ところで、上山藩がこの「薩摩藩邸焼き討ち事件」に

出役するに至る流れが『幕末之名士金子與三郎…上山市史編集資料④／一四八頁』に簡略にまとめられているので引用しておきたい。

「當時藩侯は江戸市中の取締を命ぜられ居りしが、二月二十四日夜召に應じ、家老山村縫殿助、留守居仁科大之進を帯同して登營せしに、大目付木下大内記、目付松浦越中守、長井筑前守等列座にて、三田鹿兒島藩邸に浮浪の徒、潜居するを以て捕獲すべきの内旨を傳へらる。庄内の酒井侯、鯖江の間部侯、同じ命を蒙る。

初め浮浪の徒多数薩邸に集まり、市中富豪の家を却掠し、市民為に門戸を閉じ、業を廃するに至る。依て庄内藩、鯖江藩及我藩に命じて、市中を監視せしめらる。或る夜、三田にある庄内藩の屯所を砲撃せしもの



あり、衛士追躡せしに、其人の薩邸に逃が入るを確かめ、酒井侯より事の由を具申し、討伐の擧に及びしものなりといふ。」

ただし、この資料にはなぜか岩槻藩についての記述がないが、他の様々な資料を紐解くと、薩摩藩邸への出役命令を受けた藩は庄内藩(支藩松山藩含む)、鯖江藩、岩槻藩、上山藩の四藩に間違いはあるまい。

さて、十二月二十五日未明、これらの命を受けた各藩は薩摩藩邸(上図版黒ベタ部)を包囲。ただし庄内藩が受け持つ北門と西門のうち、西門付近では意図的に包囲を緩めている。これは窮鼠とならないよう用意された脱走経路であるといわれている。そして、まずは交渉役の庄内藩士阿部藤蔵が薩摩藩邸を単身で訪問。藩邸の留守居役の篠崎彦十郎を呼び出し、賊徒浪士を武装解除の上で一人残らず引き渡すよう通告した。薩摩藩邸側は、後日、こちらから出向いて返事をする引渡しを拒否。阿部を藩邸の外に送り出した篠崎は、外の様子を探るために藩邸のくぐり戸を出るが、そこには庄内藩兵が待ち受けており、犯罪者引渡し拒否を知った兵に槍で突き殺されている。阿部藤蔵が「もはや手切れでござる」と呼びかけ、それを機に旧幕府方は討ち入りを決行。包囲する庄内藩兵たちも砲撃を始め、同時に西門を除く三方から薩摩藩邸に討ち入りを開始したのである。

上山藩の部隊は鯖江藩、岩槻藩の部隊とともに薩摩藩邸の南西面を包囲したとされている(『上山市史・中巻』一九三頁参照)。「藤井御傳記」(上山市史編集資料(一))に詳しく紹介されているので引用してみたい。

「我兵及鯖江藩は南の方松平阿波守茂昭の邸より進撃す。邸内火起こり火勢甚だ熾んにして烟焰天を焦がすが如く、弾丸雨降し、或狙撃しあるひは格闘し、三藩力戦周囲挟撃しければ、浪士等事の倉卒に発り防戦の術なく進退維れ谷りて我手の方へ潰走し来りければ、藩兵力を合せ北ぐるを逐ふて尾撃せり」

旧幕府側は総勢約千三百人、うち上山藩の部隊は、石川林著『事件で綴る幕末明治維新史・上巻』によると、大砲二門を含む三百三十人(異説あり)であった。

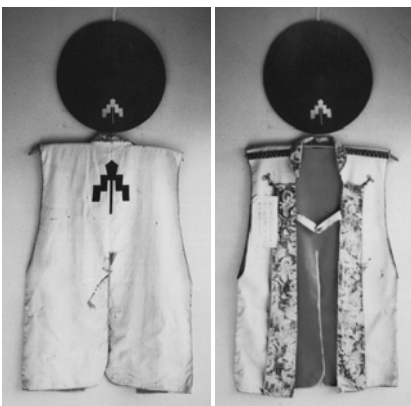
- 銃士隊／二百人
- 槍 隊／五十人
- 大砲隊／三十人(砲二門)
- 輜重隊／五十人

迎え撃つ薩摩藩邸や薩摩藩お抱え浪士も総勢五百名をかぞえ、応射するなどして奮戦するが、戦闘開始から三時間を経過したころには、旧幕府側の砲撃や浪士らの放火によって薩摩藩邸はいたるところを消失、踏みとどまれる状態ではなかった。当初より脱出を指示されていた浪士たちは、火災に紛れて藩邸を飛び出し、二十数名が一組となって逃走。相楽総三、伊牟田尚平らを

始めとする数組が、旧幕府の包囲網をくぐり抜け、道筋の民家に放火するなどしながら追跡を錯乱し、品川の港へと向かった。目指すは停泊している薩摩藩の運搬船翔鳳丸であったが、焼き討ちと同時に翔鳳丸は旧幕府の軍艦回天丸の接近を受け、沖合いへと逃げ出した後であった。浪士たちは漁師らから小船を奪うと、沖合いへと船を出し、翔鳳丸を目指していたが、翔鳳丸は再び回天丸の接近を受け、錨を揚げて江戸からの撤退を決断。かろうじて先に乗り込んだ相楽総三ら二十八名を収容し、残りは置き去りにして紀州へと向け出航したのである。残された者は羽田方面へと船を向けたが、上陸後にほとんどが捕縛されたといわれている。

この焼き討ち事件による

- 死者は、薩摩藩邸使用人や浪士が六十四人、旧幕府側では上山藩が九人(師岡弥三郎・成橋十内・鈴木角助・小川栄太



薩摩藩邸への出役で死亡した上山藩士陣笠  
鈴木角助が着用していた陣羽織と陣笠  
写真提供：山口忠夫氏(上山市)

郎・柏倉嘉傳治・早坂助市・渡邊藤五郎・金子与三郎・瀧口俊作)、庄内藩二人の計十一人であった。また、捕縛された浪士たちは百十二人におよんだと記録されている。

先に引用した『藤井御傳記』には、この薩摩藩邸への出役であげた上山藩の戦果として「亥牌戦ひ漸く止み



薩摩藩邸への出役で死亡した上山藩軍司令官金子与三郎の遺族金子市(弔)蔵に宛てた褒賞の草稿か(加増および白銀二十枚の授与の事などが記されている)。大久保家所蔵(山形市)

ぬ。藩兵獲る所、首級五、砲殺するもの七人、鞍馬杵疋、鉄砲五挺、大小刀三本、陣羽織二なり」の記載がみられる。

この薩摩藩邸焼き討ち事件の詳細が大坂城にいた徳川家の幹部の元へ伝わったのは事件三日後の慶応四年(二八六八)十二月二十八日、対薩強硬派として知られる大目付滝川具挙と勘定奉行小野広勝によってであった。老中板倉勝静と前將軍徳川慶喜はもはや沸きあがる「薩摩討つべし」との声を抑えることができず、薩摩藩の目論見どおり旧幕府は討薩への意思を固める。状況の変化は西郷隆盛と大久保利通の思い描いた通りに推移していくことになるのである。

旧幕府は朝廷へ「討薩」を上表し、慶応四年(一八六八)二月、軍を編成して京都に向けて進軍を開始する。この京都での薩摩兵への攻撃は、言うまでもなく鳥羽・伏見の戦い、そして戊辰戦争へと繋がっていくことになることは周知の通りである。

ところで、この幕末史の転換点となったともいえる「薩摩藩邸焼き討ち事件」を、討幕派の実践部隊としてその重責を担った赤報隊については、あまりにも惨めな後日談がある。

課せられた任務、旧幕府側への挑発に見事成功した相楽総三たちは、慶応四年に入るとすぐ「赤報隊」と

して公的に認証され、正式に薩摩・長州軍東山道軍の先鋒を務めることとなる。いよいよ薩摩・長州軍の東海道鎮撫総督指揮下の部隊として組み込まれることになるのである。そして「赤報隊」は、「年貢半減」をアピール、つまり新政府軍は年貢半減を公約し、民衆の心を引き寄せながら信州方面へと軍を進めた。この「年貢半減」の公約は、薩摩・長州中枢の裁可を得て発したもので、決して「赤報隊」が勝手に宣伝した訳ではなかった。この頃、各地で「世直し一揆」と呼ばれる一揆が頻発しており、そういう情勢下にあつて「赤報隊」の掲げるスローガン「年貢半減」は大いに受け、薩摩・長州軍の東進を大いに助けていたのである。

ところが、薩摩・長州は、このことを「赤報隊」に対して口頭で許可、何ひとつ文書にして残してはいないのだ。そして、一定の成果を得た後、直ちに「年貢半減」の公約を取り消し、「赤報隊」が勝手に触れ回ったものとし、「赤報隊」を「偽官軍」であるとして追討してしまつたのである。それを受け相楽総三以下「赤報隊」一番隊は、慶応四年三月早々、下諏訪にて処刑されている。但し、隊が担いでいた二人の公家は処刑されることはなかったばかりか、勤王派御陵衛士が中核となつていた二番隊も処刑されることなく、京へ引き戻され改めて新政府軍に編入されているのである。しかし近江出身者で編成されていた三番隊の隊員たちは桑名で

無慈悲にも一番隊隊員同様処刑されているのである。

つまり相楽たち「赤報隊」は、とりわけ一番隊、三番隊は、「王政復古」に失敗した薩摩・長州と岩倉具視たちの考える武力討幕という謀略のために徹底的に利用され、不要になった時点で使い捨てにされただけの組織であつたのだ。遡ってみていけば江戸市中を攪乱している時の「赤報隊」はまだ非公式の組織であつたこと、これはつまり江戸攪乱作戦がたとえ失敗に終わったとしても誰も責任を負う必要がないところでの、西郷と大久保、それに岩倉の私兵としての行動だったということにはほかならない。つまり得体の知れない浪士たちの作業として処理できるように仕組まれていたということである。それに「年貢半減」の政策についても、その実、新政府が掲げたスローガンであるにもかかわらず、あえて証拠を残さないよう仕組まれたものであつたのだ。口頭での許可という形をとることによつて、新政府が文書で正式に認めていない謀略的宣伝を赤報隊が勝手にでっち上げて触れ回っただけの事にして済ませたかつたのである。

これら一連の流れを考えてみれば、新政府は作戦終了後に相楽たちをどのように処そうとしていたのか、事の初めから予め決まっていたようなものなのである。策士・西郷隆盛、恐るべしである。

言の葉倶楽部最新第九号をお届け致します。

本号より福岡俊一氏が再び加入され、久しぶりに爽やかな風が吹いた感じがです。

さて、本号は寄稿原稿も多く、大幅な増ページと相成りました。このことはそれ自体たいへん喜ばしい反面、これまで事務局のパソコンとレーザープリンターで、DTPとして自己完結的に製作出来ていたのですが、分量的・労力的にその個人製作の限界を越え、不可能となってしまうました。

つまり、ページアップしたデジタルデータを今号より印刷屋に外注する流れとなり、経費的な負担をこれまでより多くお願いしなければならなくなってしまいました。

とは言っても、他の同人誌の会費に比べ、相対的にはかなり安価なレベルで抑え得ていると思います。なにとぞ、ご理解の上、ご協力をお願い致します。

暑い夏もようやく終息し、ようやく過ぎやすくなってきました。読書や執筆にはもってこいの季節です。次号へむけ大いに筆を揮って下さい。

次号第十号の原稿締め切りは二月末日、発行予定は三月下旬ですので、宜しくお願い致します。

## 言の葉倶楽部-II 第9号

2012.9.30発行

限定150部



共同編集

岩井哲・大原瑩

発行

言の葉倶楽部刊行会

表紙画／大竹順子

シリーズ作品

KI・MA・GU・RE



事務局

書肆犀(しよさい)

上山市石堂 7-3-2

☎023(673)3040

E-mail

sai-tetu@sea.plala.or.jp